とある殺人鬼と紅い吸血鬼の幻想話

トランジスタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある殺人鬼と紅い吸血鬼の幻想話

【Ｎコード】
Ｎ３２５９Ｕ

【作者名】
トランジスタ

【あらすじ】
人間シリーズでお馴染みのぜろりんが幻想入りしてしまいました。
「嫁と嫁をくっつけたら最強なんじゃね？」
と誰かが言った。
それからおかしな物語が始まる。
彼は何故来てしまったのか。
彼は帰れるのか。
それは作者にもわからないことだった。

需要があるのか不明のまま供給。
勢いとノリだけで俺は書く。

全ては我が戯れ言なーり！！

零崎人識が幻想入り、彼はどこから来たのか（前書き）

ぜろりんは姉の嫁！
フランは俺の嫁！
と、言う事で始まりました。
どうぞ、読んでやってください。

零崎人識が幻想入り、彼はどこから来たのか

紅魔館の門番である紅美鈴は困っていた。
門番といっても主な仕事と言えば来客の中継ぎくらいなもので非常に暇ではあるが、美鈴は花壇の管理をしたりメイドの妖精たちと話したりしてまあまあ楽しくやっていた。最近では咲夜さんが偶に持ってきてくれるお菓子の差し入れが待ち遠しく、門の前で笑顔で突っ立ている彼女である。
さて、そんな彼女が困っていたというのは、実は結構深刻な問題であった。手を出そうにも親切心より警戒心のほうが高くなってしまってどうにも遠巻きに眺めてしまうもの。即ち、行き倒れのことである。
「あのー、大丈夫ですかー？」
全く大丈夫でないのは美鈴も気付いていた。気を操ることが出来る美鈴にはこの行き倒れている人が死にそーな感じになってるのは容易に分かった。そして、まだ生きていることも。
「……助けたほうが良いのかな。うん、そうに決まってる。あ、でもまた厄介事持ち込んでとか言われるかも。うーん……」
美鈴的には当然助ける。目の前に死にそうな人がいて助けない訳無い。だが、それはあくまで美鈴的な話であってこの館のお嬢様や咲夜さん的にはどうなのか。まあ、美鈴は端からそんなこと気にもしてなかったが。
「せめてこの人がお嬢様の暇つぶしとなるような人でありますように」
そんなことを言いながら美鈴は行き倒れの人を館の中へ運んであげようと近づいていった。
しかし――
「……？」

美鈴は行き倒れの人から数歩ほど開いたところで立ち止まってしまった。そして、少し顔を顰めた。
違和感、と言うほどの何かがあったわけではない。だが、美鈴は確かに違和感に似た何かを感じ取っていた。
一歩近寄る。結構小柄だ。体格的には霊夢か魔理沙よりは大きいけど咲夜さんよりは全然小さい。それに、見慣れない服を着ている。外来人だろうか。
もう一歩近寄る。髪は白だが、所々斑になっている。美鈴が見た感じ、元の髪の色は黒のようだ。
さらに一歩近寄る。線が細く綺麗な顔をしてる。ただ、女の子ではない。この幻想郷では本当に珍しいが、外来人ならまあそうでもない。別にそんなことは私は気にしない。
二歩ほどの距離をあけた所で、美鈴はまた立ち止まった。これ以上近づくのはなんだか無謀な気がしたのだ。
「……何でそんなこと考えてるのかしら、私」
美鈴は手負いの狼に近づく様な心持ちで立っていた。その時はっきりと“これ”に関わると碌な事は起きないと分かってしまったから。この予感はきっと当たる。だが、美鈴に目の前の助ければまだ間に合う人を助けるのに理由は要らなかった。
不用意に近づいてはいけないと心のどこかが警告するのにも関わらずまた一歩近づく。まだ大丈夫だ。右の頬に大きな刺青がある。それが見えて、美鈴は自分の予感が強ち間違ってないと確信した。
こういうのは大概危険なんだ。と、美鈴は在りし日の咲夜さんを思い出す。
大振りのナイフと銀の懐中時計だけを手にこの紅魔館にやってきた彼女は、最初の頃はそれはもう大変だった。メイドは殺すし美鈴にナイフを突き立てるし。彼女が今メイド長として立派にやっているのは美鈴のおかげであると言っても過言ではない。ああ見えて常識が無いのだ、彼女は。
しかし、今は目の前の行き倒れだ。美鈴は慎重にまた一歩近づい

た。すると、
「――――っっ！？」
突然、行き倒れの少年が（たぶん歳はそれくらいだろうと美鈴は見当を付けた、実際は全然違うが）飛び起きた。そのままどこから出したのか大きなナイフで美鈴に襲い掛かる。しかし、美鈴だって警戒はしていた。初撃を難なく避ける。美鈴が得意とするのは弾幕ではなく格闘技なので、当然といえば当然でもある。
間髪入れず少年は少し開いた距離を一瞬で詰める。つい先程まで倒れていたとは思えない動きだ。無駄が何処にもなく、恐らく今彼が相手しているのが美鈴ではなく魔理沙などの一般人であったなら、息吐く暇無くあのナイフの餌食になっていただろう。
美鈴はその体裁きに素直に感嘆した。外来人でここまでの動きを見せてくれたのは咲夜さん以来だ。彼女も美鈴に会うなりナイフを向けてきた。その時は彼女の時を操る能力に圧倒されてしまい、あえなく敗れたが。
そんな風に昔を思い出していたからだろうか。少年のナイフから逃げ切れず、切っ先が美鈴の首へと迫った。
首は駄目だって。思うが無駄だ。美鈴に出来るのは、後は目を瞑る位だった。
「……？」
いつまで経っても自分の首が身体からさよならしない。不思議に思い美鈴が目を開けると、首に少し食い込んだだけで止まっているナイフがあった。さらにその先には俯く少年も。
「……腹、減った……」
少し涙声で少年は言った。

零崎人識が幻想入り、彼はどこから来たのか（後書き）

美鈴がんばれ。
とりあえずはプロローグ！

零崎人識が紅魔館入り、彼は胃袋キャラではない（前書き）

長いので半分に切ってみた。
お洒落ガンバリスト言うな！

零崎人識が紅魔館入り、彼は胃袋キャラではない

少年の名前は零崎人識という。１９歳、少年と呼べる時期など既に過ぎてる。一メートルと半分よりも下くらいしか背丈が無い彼はぱっと見霊夢たちと変わらない。だがその実は、殺人鬼集団の零崎一賊の秘蔵っ子であり、生粋の殺人鬼なのだ。詳しくは戯言シリーズか人間シリーズをご参照のこと。しかし、まだ彼は美鈴に自己紹介などはしていないので、地の文でも表現を“少年”のままにしておこう。

「で、君は何処から来たのかな？」

紅魔館の厨房。ひたすらご飯をかきこむ少年に業を煮やした美鈴はそう問いかけた。返ってきたのはモフモフという言葉にすらなっていない声。

「……いい加減、きちんと喋って下さいよ。『腹減った』しか言ってないじゃないですか。後、そのご飯はお握りにしてあげようと思って炊いたんですけど」

「モフモフ、ムグムグ……旨いぞ？」

「しゃもじを置いてから喋って下さい」

正直な所、美鈴はこの少年の扱いに困っていた。まだ咲夜さんにも報告しておらず、その前に見つかったらそれはきついお仕置きを食らうことになるだろう。その後お嬢様の玩具にされるかもしれない。外来人らしいしので最終的には巫女に引き渡さなくてはいけないし……。

「しょうがねえな、話してやるよ。実はだなぁ……」

漸く話してくれる気になったらしい。美鈴は少し身を乗り出して、続きを促す。外来人（生存）に会うのなんてここ幻想郷においては一、二を争う大事件だ。と、言ったらかなりの過言ではあるが、どうしてこんな所に来てしまったのかは気になる。一般の外来人とは

違う独特の雰囲気を持った少年は、他の外来人がする行動を今のところ一切取っていない。変な四角い箱（山の巫女が言うには携帯電話というものらしい）を耳に当てたりとか。それが少し気になる。
「実は……俺も良く分からねぇんだ」
「はぁ、そうですか」
当たり前か、と納得する。外来人で幻想郷にきた理由など覚えているほうが稀だ。
「で、貴方は人生に絶望でもしたんですか？　ただ迷っただけですか？　いずれにせよ早く帰ったほうがいいですよ」
「あ？　何だ人生に絶望って」
少年は首を傾げる。何か気にかかることでも言っただろうか。だが彼は直ぐに気にしない事にしたのか、またしゃもじを握るとご飯を口に運ぶ。
「で、背の高いキレーなお姉さん、ここはどこだよ？　京都とか言わないでくれよ」
さりげなく褒められた？
「紅魔館ですよ、幻想郷の。あ、幻想郷って分かります？」
「知らねー、何県よ？　あんたみたいな俺のナイフ軽く避けちゃう奴らばっかいるのか？　プレイヤーじゃない、割には慣れた動きだったな」
独り言のように少年は呟いた。丁寧にご飯粒一つ残さず食べ終えたおひつを置いて、両手を合わせる。
「うん、腹いっぱい。で、幻想郷って？」
「日本の何処かに在る場所、大まかな位置すら私は知りませんが、現世で忘れ去られたものの終着点らしいです。誰が何の為にそんな結界を張ったのかとかは博麗の巫女に聞いた方が良いでしょう。幻想郷はかなり昔からあったらしいですから。
とにかく、ここには貴方のいた場所とは別の世界だと考えて下さい。山の巫女が言うには、ちょっと幻想郷は時代遅れだと。何言ってるか分かりませんけどね。“要するにもの凄いど田舎”だそうで

すよ。その認識で間違いは無いらしいです」
美鈴は分かったのかなと少し心配した。少年は整った眉を寄せて何か考えているようだ。理解が追い付かないのか質問しようと考えを練っていれのか、はたまたご飯のおかわりをしようか悩んでいれのか皆目見当の付かない顔で少年は唸る。
「それってつまり、俺は皆に忘れ去られた可哀想な奴って事か？だが、あの欠陥製品はともかく伊織ちゃんが俺を忘れたりするか？
いや、無いな。無いと思いたい。きっと今頃は『あのお洒落ガンバリストは一体どこに行ったんでしょうね。早く掴まえて服装を改善させないと』とか言いながら八つ橋食ってるに違いない。ってか言っててムカついてきた。お洒落ガンバリストとか言ってんじゃねぇよ、あの野郎。うわ、殺してー。まあ、それは良いとして、良くねえけど、皆が皆忘れたりなんてしてない筈だから……」
その呟きを聞いて、漸く美鈴に合点がいった。どうやら少年は知り合い皆に忘れられてしまったのではと心配しているらしい。
「あの、別に貴方の知り合い全員が貴方の事を忘れてしまった訳では無い、と思いますよ。よく迷子になって来てしまう人は多いんです」
そうフォローした。美鈴はその心算だったのだが少年には何か思う所があるらしく、あーやっぱり人生でも説いて貰えば良かったかもしれねえ、とテーブルに突っ伏してしまった。美鈴は扱いに困って挙動不審になっている。これではどちらが客なのか分からない。
厨房の戸が軽くノックされた。
「美鈴、いる？」
「あ、はい、咲夜さん。なんでしょう」
美鈴は返事してから失態に気付くという凡ミスをやらかした。しでかした。先に相手に見付かるとお仕置きが酷くなる。当の本人は未だにテーブルを抱擁している。美鈴の座る席から扉まではおよそ十歩ほど。
……無理だ！　美鈴は諦めた。

そうこうしてる内に咲夜は入って来た。

零崎人識が紅魔館入り、彼は胃袋キャラではない（後書き）

ご飯粒一つ一つには神様が（ｒ
ぜろりんが胃袋キャラになっている！？
何とかしなくては。

零崎人識が俺の嫁入り、深刻なエラーが発生しました（前書き）

嫁降臨！！！

テンション高めでお送りいたします。

零崎人識が俺の嫁入り、深刻なエラーが発生しました

そうこうしてる内に咲夜は入って来た。
「んあ？」
少年は体を起こして気だるそうに咲夜を見て、妙に納得した顔で頷いた。
「あー、成る程な」
「ささささ咲夜さん、あのですね、彼がいるのはやんごとなき事情と言いますか行き倒れ的事情と言いますか、とにかく事情があるので……っひゃ！」
美鈴は訝しげに少年を見ている咲夜に弁明しようと近付いた所を捕らえられ、扉の外まで引き摺られていった。疑問符だらけの顔を睨み付けて、咲夜は不機嫌に訊く。
「それで、また厄介事を連れ込んだの？　彼は誰？」
「……誰でしょう」
そう言えば名前すら聞いていない、と思いながら美鈴は上目遣いで様子を見る。咲夜はそんな彼女にあからさまに肩を落として溜め息を吐いてみせた。いつの間に、美鈴を頼りなく感じるようになったのか。いや、昔からお人好しではあった、と思い返して、今度は心から溜め息を吐いた。
とりあえず、美鈴にあの危険なのの相手をさせる訳にはいかないと咲夜は思った。
「彼の相手は私がするわ。貴女は自分の仕事に戻りなさい」
「いえ、私にもやらせて下さい。彼は私が拾いましたから」
咲夜は不思議そうな顔をして美鈴を見た。美鈴としては少年の持つ雰囲気が幼い時の咲夜と似ていたので、なんとなく二人きりは良くないなと感じていたのだ。
「……好きにしなさい」
正直、咲夜とっては説得とかだるかったのでそれだけ言って、扉

を開けて厨房へと戻る。厨房には相変わらず不遜な態度で胸を反らしている少年の姿があった。
　咲夜は少年をよく観察しながら自分の中の気持ちを驚きと共に考えていた。少年はポケットから出したサングラスを片手で弄びながら咲夜を見返して、何が面白いのかかはは、と笑った。
「傑作だぜ。何でかは知らねぇが、俺がこんな所に迷い込んだのと何か関係ありそうだな。きちんと生活できてるようだから零崎ってこたないだろうが、……こりゃ一体どーゆーことかねぇ」
「貴方、名前は？」
　訊くと、そいつはニヤニヤと笑いながら更に笑った。
「零崎人識だ。人に名前を聞く時は……」
「咲夜よ、十六夜咲夜。それで、貴方は何者？」
　美鈴がお茶を運んできた。紅茶じゃなくて番茶だったので美鈴の私物だろう。人識と咲夜にお茶を配ると、自身は咲夜の隣に座って一息吐く。なんだか緩みまくった態度だ。
「俺？　うーん、ここで『零崎一賊の秘蔵っ子、零崎人識たー俺の事！　お前らまとめて殺して解らして並べて揃えて晒してやんよ！』っとか言っても伝わらねえんだろうなぁ。じゃああれだ、ナイフ使いの殺人鬼です？」
「ああ、そうなの」
「納得するなよ」
　人識は番茶を啜って眉を潜めた。咲夜の反応が気に入らないらしく、少し膨れっ面で大きく体を伸ばす。その気ままな姿に、美鈴は猫みたいな人だなと思った。犬属性の咲夜とは全然違う。
「そこはもうちょいリアクションが欲しいぜ。田舎でも殺人事件くらい起こるんだろ？」
「ここは田舎じゃないし、主人が本物の鬼なのに何を驚けと。ただの人間なんてインパクト弱すぎて相手にされないわよ」
　ただの人間。よもや天下の零崎一賊を掴まえて“ただの人間”とは。彼の世界が四つに別けられた社会の中でも一番神話じみた体を

為す場所だとか、そこに所属する化け物共を何とかいなして生きる殺人鬼だとか、話して聞かせて理解出来るような話ではないにしろ、“ただの人間”扱いでは一賊の長兄が泣く。人識はあまりそういう事は気にしない性質であったから多少驚きはしたものの、簡単に流してしまった。悪いことに。

「あ、現世で忘れ去られたものってそういうことか。妖怪やら今は無き習慣やらが残っていると。ん、でもそれだと前提として“昔は存在した”ってことだよな？　こいつぁ傑作だ。怪異は存在したのだってか？　かははっ」

笑顔可愛い殺人鬼は快活に笑うと、椅子の前足を浮かして前後に揺らし始めた。足を刈って蹴倒したくなる衝動を抑えながら咲夜はこの不思議な少年を観察する。

この底無しに深い瞳を咲夜はどこかで見ている。どこでだったかは分からないが、恐らく毎日のように。

「自称殺人鬼さんはお嬢様に会って貰います。でもまだ日が高いので暫く――――」

「さぁくやぁあぁぁっ！」

勢い良く厨房の扉が吹き飛ばされた。蝶番ごと外された扉が溜め息を吐くように倒れかかる。位置的に美鈴が下敷きになりもがいた。

「咲夜！　エマージェンスよ、緊急出動よ！　魔理沙が帰っちゃった！」

扉を吹き飛ばした人物は倒れた扉を踏みしめて（美鈴が悲痛な声をあげた）厨房へ弾丸のように踏み込んだ。か細い金糸を横で結うサイドポニーテールを揺らし、血の紅に沈んだ深い瞳で部屋を見回す。

ああ、と咲夜は妙に納得して軽く肩を揺らした。少年の持つ雰囲気は、そのまま少女のものだ。咲夜が見た瞳とは自室で鬱ぐ少女のものだ。

「フランお嬢様、魔理沙にも用事くらいありでしょう。無理強いはよくないですよ」

「えー、あの魔法使いの為だよきっと！　そんなことより遊んで欲しいのに……ん？　あんた誰？」
人識の顔を覗きこんで険のある声で聞いた。咲夜は不穏になる空気を察知してひきつった笑みを浮かべた。どうやら人識はレミリアに引き合わされる前に大変な目に合うらしい。
「どうも通りすがりの笑顔の可愛さに定評がある殺人鬼です」
「いや、人識さん通り過ぎれてなかったじゃないですか。あとフランお嬢様は退いて下さい」
ていうか笑顔可愛いとか自分で言うなよ。
「ふーん、外から来たの？　変なカッコ。ね、暇だから一緒に遊んでくれないかしら？」
咲夜は横目で人識を見た。華奢な体はフランがちょっと力を入れれば壊れてしまうだろう。想像の中で人識がこれまでの人間と同じように爆砕する。人識が何か言おうと口を開いたのを片手で制して咲夜は言った。
「お嬢様が起きてくるまでなら良いですよ。大切なお客さまなので怪我などさせないように出来るだけ穏やかに遊んで下さいね」
「おい、俺は遊んでやるなんて……」
「わーい、遊んでくれるの！？　優しいお兄ちゃんだね！　ねえねえ、私鬼ごっこがしたいな！」
「止めて下さい。また館を破壊する気ですか。あとフランお嬢様は退いて下さい」
フランは楽し気に笑うと人識を厨房の外へ連れ出した（解放された美鈴が安堵の溜め息を吐いた）。異を唱える暇無く事は決まってしまったようで、人識は何だか力の強い少女に引き摺られながらどうしたものかと考え込んでみた。
本来であれば殺人鬼たる人識がご飯を食べさせてもらった程度で感じる恩義は無い、いや方向を変えれば大いにあるが、こちらは行き倒れて死にそうになっていたところを危うく助けてもらった身である、多少なりとも恩義を感じ返してやるのが筋というものか。か

と言って幼女のお守りなどはごめんだ。さっさと“お嬢様”とやらに会って帰りたいところだ、がやはりそれには待たなくてはいけない。

人識はこちらを珍しい動物を見るかのように見つめる深紅の瞳を見返した。フランは軽く笑って何気無く彼の肩に手を伸ばす。

「うぉっ！」

その手に込められた尋常でない殺気を感じ取って反射的に身体を捩る。辛うじて避けられた。が、二人で不思議に顔を見交わして、お互いに首を捻った。人識には会ったばかりの少女が突然、当然のように殺気を放った事が、フランには初対面の人にあからさまな拒絶を食らった事が、よく分からなかった。

「……」

何かを確かめるようにフランはもう一度手を伸ばした。今度は何の抵抗無く人識の肩に触れる。

「……」

二人はしばらく廊下で立ち止まって顔を見合わせていた。

零崎人識が俺の嫁入り、深刻なエラーが発生しました（後書き）

フランちゃんかわいいよフランちゃん。
咲夜さんは実は……。
おおっと、それは次回。

空白、彼女の背負った過去（前書き）

要するにおまけ。
本編に関係ないおまけ。
メーサクですね、わかります。

空白、彼女の背負った過去

「大丈夫ですかね？　フランお嬢様に任せたら、いくら彼がただ者でなくてもただじゃ済まないでしょう」
「大丈夫よ、……多分ね」
顔に付いた木目の模様をなんとか消そうと顔を揉みほぐしながら、美鈴は口を尖らせた。いくら待ってもお説教が始まらないのでちょっと拗ねてみたのだ。別にお説教されたいわけじゃないけど。
「……」
咲夜の態度がおかしい。特に何を言うでも無く、ただ座ってコップを弄っている。メイド仕事は沢山あるのに彼女は動かない。しばらく沈黙が続いて、ようやく美鈴は咲夜が何か相談事があるのだと気付いた。鈍い奴である。
「どうしたんですか？」
「美鈴、私が来た時の事覚えてる？」
「ええ」
勿論。忘れる筈もない。
「何て言ったら良いか分からないけど、私は、あの頃殺人鬼だったの。人識とやらが言うように。もう何年も昔の筈なのにまだ覚えてる。……何の感慨も無く人を殺す感覚を」
美鈴は何も言わずに頷いた。咲夜はレミリアやフランの為に人を殺す事が多々ある。平和に暮らしていても社会の本質は変わりはしない。だが、彼女が今言っているのはそういう事ではないのだろう。
「彼を見た時それを思い出したわ。そして久しぶりに“殺したく”なった、無意味にね。それが、……私は怖い。恐ろしくて仕方がない。幻想郷では殺人に意味なんて存在しないから、お嬢様の下ですっかり忘れてた筈、なのに思い出してしまった。私は、そんな

古い感覚に引っ張られてしまいそうで、怖いわ」
　里の者を除けば、幻想郷ほどの楽園は存在しないだろう。誰も彼も簡単には壊れてしまわない者ばかりだ。それ故、皆忘れてしまうのだ。自分たちは本当は絶対に相容れないものだということを。
　美鈴はいつか良く彼女にしたように肩を抱いて頭に顎を乗せた。腕の下で咲夜の体が強ばるのを感じる。
「咲夜さん、貴女は昔は手の付けられない暴れん坊で、命の尊さを教えても私の事は終始ナイフで刺してました。今でもたまに刺しますけど、昔と違って私を殺したい訳じゃないでしょう？
　人は成長するものです。私は貴女は二度と“殺人鬼”なんかにならないと確信してます。それに私だけでなくお嬢様だってパチュリー様だっているんです。絶対大丈夫ですよ」
「……ええ、きっとそうね」
　柔らかく微笑んで、咲夜は美鈴の腰に手を回して強く引いた。昔と違って今は体も大きくなっているけれど不思議と恥ずかしいとは思わなかった。安心しきって美鈴に体重を預けた。
「……」
　美鈴は困り果てた表情で天井とにらめっこしていた。

空白、彼女の背負った過去（後書き）

咲夜さんは零崎だという妄想。
でも、零崎になる可能性があったというだけの話。
「家族」がいるのだから孤独な殺人鬼にならなくてすむ。

零崎人識がスペルカード戦入り、零崎は殺気に反応する（前書き）

フランちゃんがぜろりんを苛めます。
あと、増えたりします。

零崎人識がスペルカード戦入り、零崎は殺気に反応する

油断ではなく、ただ純粋に想定していなかっただけだ。
「いっくよー」
「っだぁあ！」
人識は上空より飛来するカラフルな弾を避けながら呻いた。数時間、いや数分前に『スペルカード』とやらの説明を受けて、今は実戦中。人識はフランが宙に浮いた状態で放つ“魔力の弾”を必死で避けている。
「大体、“魔力”って何だよ。いくら“失われたものの終着点”っつっても反則すぎんだろ」
考えてみれば、今起きてる事象を説明するのが魔力だろうが気だろうが同じだ。人識のいた世界では化け物じみた反則的能力を所有する化け物がわんさかいた。今更そこは気にすることではない。
だが、この『スペルカード戦』は人識にとって不利としか言い様がなかった。零崎一賊は殺気に反応する。“自分を傷付ける意思”が介入する限り、彼らの相手はかなり大変だ。しかし『スペルカード戦』では“相手を狙わない攻撃”が多すぎる。効果的でない攻撃、効果的でない弾幕、相手に当たらない弾など無駄でしかないというのに。
「っち！」
幸い、弾は早くない。視認してからでも十分余裕をもって避けられる。だが数が多すぎる。
直ぐ傍に炸裂した。弾にギリギリかすった所に擦り傷が出来てじんじんと痛みを訴える。体のあちこちが痛んで中々思う通りに動けなくなってきた。
「くそ、持久戦か。きっちーな」
直撃なんてしたら大事だ。下手したら死ぬかもしれない。そう思

いながら、人識は時期を見計らっていた。
全盛期に比べれば持ってるナイフの量などたかが知れてる、たった三本だ。だが投げれば当たる距離でもある。スペルカード戦は、所詮はものの投げ合い。投げるものの無い人識に取れる選択は二つ、接近戦か一撃必殺か。
「凄い凄い！　貴方、勘が良いのね！　お遊びだったから宣言は二枚だけど、二枚目いくわよ！」
攻撃が止む。フランは胸元のポケットから出した掌サイズのカードを掲げて、高らかに宣言した。
「禁弾『スターボウブレイク』！」
フランの七色の奇妙な翼が力を溜め、地面で逃げ回る人識へと放たれた。苦悶の声を上げて人識は体を捻って避ける。
だがスペルカードは物にも寄るが弾幕が薄くなるタイミングがある。人識はベルトから抜いた大振りのナイフを構えてフランを睨んだ。
「あはっ、これも避けるんだ！　ただの人間のくせにやるわね。でもいつまで……、っ！？」
人識はここぞとばかりに手の内のナイフを投擲した。ナイフ自体の重さを利用した遠心力での投擲は、フランの放った弾には掠りもせずに一直線に飛んでフランの眼前へと迫る。同時に人識は後悔もしていた。全力でナイフを放ったために体勢を立て直せなくなった所に弾が向かって来ている。
両者ともが自分の勝利と敗北を確信したそのとき――――
「『咲夜の世界』」
――――時が、止まった。
「……へ？」
何の脈絡無く、人識は激戦の場所から少し離れた所に座り込んでいた。フランも先ほどと変わらぬ位置で茫然と座っている。その顔に傷は無く、血の痕も無い。
「フランお嬢様、私は大切なお客様なので怪我させる事の無いよう

に穏やかな遊びを、と言った筈ですが。覚えてましたか？」
やはり何の脈絡も無しに、咲夜は人識の背後に現れていた。先ほどと同じ古風なメイド服に、手には人識が投げたナイフを持っている。
「……覚えてたわ。今までは忘れていたけど」
混乱する人識をよそに、フランは責める口調の咲夜に唇を尖らして抗議した。忘れていたのはわざとだから彼女に反省の色は見られない。
「でもでも、この人があんまりにも面白かったからちょっかい出したくなっちゃって」
「……気に入られたわね」
咲夜は人識の方をちょっと見て肩をすくめて見せた。
「さあな。ところでお前、今何したんだ？　何かしたようには見えなかったがな」
人識はナイフを受け取って元の位置に戻して、立ち上がってズボンの埃を払った。凄まじい攻撃の余波か、彼の服はあちこちが破れていて擦りむけた皮膚が覗いていた。
「っち！　兄貴が見たら何て言うか。でも、この状況じゃあ仕方がねえよな。下手すりゃ兄貴や大将だって避けられない筈だ。……いや、やっぱり掠りもせずに避ける気がする」
「大きく動くと被弾するから逆に掠りに行くのよ。『グレイズ！グレイズ！』って」
フランも立ち上がって埃を払うと二人の側にやってきた。頬を膨らませて話している二人の周りを回りだす。
「何したのって聞いたけど、私は普通に……あ、分かった。そうね、知覚出来なくて当然。私は時を止めたのよ」
「あー？　時宮か、お前？」
「時宮？　何よそれ。言っておくけど、私は意識の空白を作るとかそんなんじゃなくて、本当に時間を止めるの。停めている間は私以外は動くことも出来ない」

人識は名前のイメージだけで時宮かと聞いただけだが、時宮は時間を操るわけではない。以前彼が会った時宮時刻に至っては幻術の一種を使用していた。

どちらにせよ強力な能力か。人識の必殺の一撃を避けた美鈴といい時を自在に操るらしい咲夜といい、ここには人外が多すぎる。

「咲夜は何しに来たのさ。用が無いなら続きをしたいんだけど」

「さっきのは引き分けでしょう、続けないで下さい。私はお嬢様が起きたのでお客様を呼びに来たんです」

フランは遊び道具を取り上げられてご立腹な様子だ。二人の周りを取り囲んで文句を言う。

「「「「やーん、遊びたーい」」」」

「ちょっと待て、なんか増殖してないか？」

「「「「禁忌『フォーオブアカインド』！」」」」

四人のフランに囲まれ人識は非常に混乱した。幻術だろうか。四人の内二人の服を引っ張ってみるがちゃんと実体がある。

「ほら、行くわよ」

「「「「ぶー、また遊ぼうね」」」」

四人のフランに見送られ、混乱しながらも人識は咲夜の後について部屋を出た。

廊下はどこも似たような作りで外観からすると異常なほど広い。明らかに物理法則を無視した造りの廊下を咲夜の先導で歩きながら、人識は自分が今見ているものについて考えを巡らせた。彼のいた世界も大概のものであったが、今いる幻想郷は異常が過ぎる。途方も無く見当も付かないような世界であるが、自由気ままな人間的失格者は相も変わらず、かははっと酷薄に冷笑的に面白おかしく笑うだけだった。

「傑作だぜ」

零崎人識がスペルカード戦入り、零崎は殺気に反応する（後書き）

多分、本気でやってもなかなか勝てないんじゃないかな？
そもそも、相手を殺したりしないためのスペルカードなんだし。

霊夢とかはぜろりんにとっては鬼門だろうな。
必殺技が「目を瞑る」だからね。

零崎人識が（正式に）紅魔館入り、彼は彼女の遊び相手に選ばれた（前書き）

おぜう様です。
ブレイクです。

零崎人識が（正式に）紅魔館入り、彼は彼女の遊び相手に選ばれた

ノックは素晴らしい。閉まった扉は外の人を拒絶し、中で起きている事を覆い隠してしまうが、ノックをすればそんなことはなくなる。何よりノックをすると中に人がいるかどうかが分かるのだ。だからノックは大切。人識も昔はよくノックしたものだ。入ってますかって、頭部をナイフの柄頭で。

たからってどうもしない。

「お嬢様、客人をお連れしました」

咲夜は豪奢な扉をノックをして、特に返事を待たずに部屋へ入った。

紅魔館の三階、ロビーの真上にあたる執務室。執務室と言っても、この館の主人が勤勉な勉強家というわけではないので質素な机に浮わついて見えるほど豪華な椅子、客用のソファーしか置いていない。大きな硝子に背を向けて座った小柄な影が微かに笑んだ気がした。

「ようこそ、客人。歓迎するわ」

硝子には分厚いカーテンがかかってはいたものの閉じてはおらず、そこで漸く人識は今が夜なのだと気付いた。外を見る機会など無かったし、館の窓は一つ残らず閉めきられていて外を伺う事は出来なかったので。細い弦の張った月が空に浮かんで部屋の中を照らしている。他に明かりは無く、お互いの顔も判別出来ないほど暗い。

人識は薦められたソファーに座った。椅子に腰かけた小柄な影は背を反らし、低い声で言う。

「見える見える、貴方の運命が」

その一言で、彼女のカリスマや人識のなけなしの（溺れた時にすがる藁的な）信頼や咲夜の忠誠心がブレイクしたのは言うまでもない。

「俺帰るわ」

「すいませんでした邪気ってごめんなさい話を聞いてお願いします」
彼女は本気で立ち去りかけた人識を涙目で引き止めて、灯りが点いた部屋で土下座した。良く訓練された土下座であった。
「レミリアお嬢様、初対面の人にそういった言動は控えるよう私は忠告いたしましたが？」
「一度失敗しても懲りない、それが私。では、カリスマが完全にブレイクしたところで客人、話を聞いてちょうだい」
人識は髪の色は違うが姉妹なんだろうな、とぼんやりと思いながら、立ち上がりかけた腰を落ち着ける。咲夜はレミリアの背後に執事らしく控えて、真っ直ぐ前を向いていた。
肩で切り揃えた青みがかかった銀髪に血に紅い瞳、健康的に白い肌。緋を基調とした服装は妹と似てなくもなかったが、何より二人を姉妹だと断ずるには、その人懐こい悪戯な笑みだ。悪意に無邪気、故意に素直。振り返る彼女の微笑みは悪魔的。
「傑作、……いや戯言だな」
人識の好みは背の高い綺麗なおねーさんだ。二人はまあどちらかと言うとあの戯言遣いの方の趣味だろう。
「えっと、幻想郷の事は聞いてるかしら。本来であれば直ぐに神社に連れていくのだろうけど、今は見ての通り時間が遅いわ。あのぐーたら巫女はもう寝てるでしょうし、最近退屈してたところだから、暫くの滞在を許してあげる」
レミリアは腕を組んで至極偉そうに言った。恩着せがましい態度だが、納得はする。帰れないのであれば仕方は無い。向こうが許可を出してくれているのだから断る理由は無いし、人識は今更そんな事を気にかける性格もしていない。この翼の生えた明らかな人外も気になる事だし。
「……出来れば、あの子の遊び相手になってほしいのだけど、ね、殺人鬼さん」
「良くは分からんが承諾した。飯と寝床があればどこだろうと同じだからな。コンビニ店員に頭下げなくていいし、ここなら誰にも見

付からないだろうし。暫くの滞在を許されてやる。……ところで“あの子”って誰だ？」
「フラン、私の妹」
「ああ、成る程」
あんな頭ぷっつんの相手しなきゃいけないのか。人識は彼女の言動を思い出してげんなりとした。
「あ〝ー、うん、成る程」
「咲夜が大丈夫だから貴方も大丈夫よ、多分。気に入れたのなら爆砕はしないでしょう」
「爆砕はかなり嫌だな」
人識は出夢の一喰（イーティングワン）いを思い出して心が折れかけた。爆砕って言うか爆砕。
既に笑い話にもならないやんごと無い事情に巻き込まれている気がしたが、人識はなるべくそれは考えないようにして、執務椅子に座ってにこやかに自分を見ている蝙蝠翼の少女を見た。
「ようこそ、幻想郷へ」
面倒な事になった。

零崎人識が（正式に）紅魔館入り、彼は彼女の遊び相手に選ばれた（後書き）

ブレイクでした。
ぜろりんはまだ幻想郷のことが今一分かってないです。
頑張れ、ぜろりん。

空白、彼と彼女の事情（前書き）

ジェンガって幻想入りしてても良い代物か、悩みどころだ。

空白、彼と彼女の事情

「ねえねえ、ぜろりん。何で拗ねてんのさー」
「……誰がぜろりんだ。俺は拗ねちゃいないさ、ただ不満があって腐ってんだよ」
「それが拗ねるってことでしょ？」
まとわりつくフランを蝿でも払うように手で追い払いながら人識は呻いた。揺れるサイドポニーテールを鬱陶しげに払って溜め息を吐く。美鈴の持ってきたジェンガ（踊りじゃなくて重ねる奴）の一つを抜き取る。机の上のバベルはゆったりと揺れて元の位置へ戻った。
「何だっていいって。ほら、お前の番」
「むー、はっ！」
フランは無駄に気合いを入れて木の棒を抜き取る。それを塔の一番上に乗せようとするが人識の微妙な位置に乗せたものが邪魔で棒は安定出来ずに滑落する。人識はどうでも眠そうにジェンガの塔が崩れるのを見ていた。
「むっきゃー！」
最初の木の棒が机に着く前に、フランは奇声を上げて右手を握り締めた。人識には全く理屈が分からないが塔は消し飛んで、後には大量の木屑だけが残った。
「ぶっ、は！　何しやがる、粉だらけになったじゃねえか！　いらいらしたからって粉砕すんなよ！」
「ぷっぷー」
「うわムカつく」
人識は大きく欠伸をして木屑だらけの机に突っ伏す。服や頬に砂のように木屑が付着するが、彼は特に気にはせず呻いた。
「ねーみー」

現在の時刻は午前二時。行き倒れと睡眠は違う、のだろう。人識は眠そうに頭をごりごりと揺する。
「ぐりぐり」
それを面白そうにフランが苛める。おかしな構図だ。
「失礼します、人識さん。客間の掃除が終わったので知らせに……
……あれ？　私のあげたオモチャは？」
ノックと共に入って来た美鈴は困った顔で辺りを見回して、机の上の木屑に気付くと見てる側が可哀想に思う程泣きそうな顔をした。いつか、咲夜さんやメイド妖精達とやろうと香琳堂から貰ってきていたジェンガは無惨にも粉砕されてしまっていた。この二人にそれを説明した所で何も変わらないと知っていたから、美鈴は涙を飲んで気にしない事にした。そして同時に、彼等に秘蔵の遊び道具を二度と貸すまいと硬く決意したのであった。
一方そんな美鈴の心中を察す気もない二人は、入って来るなり気分の落ち込んだ美鈴を不思議そうに見て顔を見合わせた。人識はとにかくフランも口を尖らせて明後日の方向を見る。
「……なんか、仲良くなりました？」
「おら、俺はねみーんだ。さっさとその手を離してベッドへ行かせてくれ」
「やーよー、やーよー」
「は、な、せ、よ」
「やーよー、やーよー」
「仲が良くて何よりです」
人識はフランをころんと投げて、直ぐに部屋を飛び出した。美鈴は彼の動きに問題無く対応し、客間へ連れていく為先に立つ。背後からは鈍い破壊音が聞こえていた。
「うっひゃー、何したらあんなになるのやら」
愉しそうに笑って、人識は美鈴の後ろをついてくる。美鈴には彼が何で笑うのか分からなかったが、そう言えばフランも似たように良く分からない事で笑って、良く分からない事で怒る。ならば人識

も美鈴には分からない所で怒るのだろう。
人識とフランは似たもの同士であるという美鈴の見解はある意味では的確に的を射た考えだったが、人識はフランに今亡き戦友を重ね、フランは人識の事はただの遊び道具としか認識していない。微妙にずれた認識は改められるのか、はてさて幾人かを除けば分かる筈の無い問いか。その幾人かは未だ手を出さずに静観の構えで、物語に関わってくるのはまだ先になるだろう。
些事些末はともあれ、人識は漸く就寝準備を終えて床に就いた。少しだけ、全然知らない場所で全く知り合いのいない自分が至極当たり前のように寝ようとしている自分を鑑みて、いつもの通り一笑した。野宿に比べれば全然良いぜ、と呟いて目を閉じた。

一時間後、彼は爆音で目が覚める。

空白、彼と彼女の事情（後書き）

なんか、妙に仲が良い二人、
でも恋愛には発展しなさそうな。

今回は短かったね、
次回は人気のあの人が出るよ！
ぜろりんは出ないよ！

零崎人識が蚊帳の外、彼女は泥棒ではない（前書き）

あの人です。
宣言どおり彼は出てきません。

零崎人識が蚊帳の外、彼女は泥棒ではない

紅魔館は咲夜の所為であちらこちらの空間が拡張されている。図書館もその内の一場所で、外見からは想像もつかない程の蔵書が溜め込まれている。空間拡張とはあの相対性理論とかなんやらを応用したもので、分かり易く言うと、時間が延びると空間も伸びるということだ。タイムトラベル（空間を引き伸ばして時間を曲げる）とは逆の発想になるが、時間を操れる咲夜にとっては普通の事だ。因みに、距離を操る程度の能力、某三途の川の渡し人こと小野塚小町は相対性理論を地で行く人で、緩急自在だが止まれはしない（時間的に）。幾ら空間を引き伸ばしても時間は限り無く引き延ばされるだけだからだ。

話を戻して、図書館。暗く佇む本棚の奥には、この図書館の管理人にして齢百を越える魔女っ子パチュリー・ノーレッジの私室があり、今頃はそこでむきゅってる事だろう。具体的には、妖しげに怪しげな薬品混ぜてみたり、ベッドのしたの他人には見せられない本（無論、カバーは偽装ずみ）を読んで悦に入ったり、むきゅったり、している事だろう。

主が休んでいても使い魔は働いている。ランプの灯り頼りに主人の読み終わった本を戻して手元のメモにチェックを付け、とある魔法の効果によって何処からかやって来て積み上げられる本を棚に入れてメモに書き足す。小悪魔（正式名不明、通称はコアとかリトルとか小ちゃん）は几帳面にそれらの仕事を片付けていきながら、ちょっとだけため息を吐いた。今日やって来た外来人が気になってしまって中々仕事に身が入らない。

「また傍若無人な人だったらどうしよう。図書館焼失なんて笑えないよぅ」

さてこの図書館は広い。広々としている。小悪魔が一生懸命に仕

事をしている場所から遠く離れた本棚の影では、黒い人物が呻いていた。
「……無い」
霧雨魔理沙、種族人間の極普通の魔法使い。手の中の小さな灯りをもとに本棚を調べている。一冊一冊の題名を確かめて、項垂れる。
「……無いぜ」
魔理沙は今日パチュリーに借りた本を数冊返した。その返した筈の本が家にあって自分の本が一冊無くなっている事に気付き、真夜中に泥棒のように侵入せざるを得なくなったのだ。
「私の魔導書、……に見せかけた日記、が無い」
魔理沙は混乱した。ここに無ければどこにあるのか。小悪魔に聞いてみようか。小悪魔なら秘密にしてくれるだろう。万一でもこの図書館の紫もやしに伝わってしまったら、いいネタにされてしまう。それは実に嫌なので魔理沙は小悪魔に相談してみることにした。
歩くより飛んだ方が早いと判断して魔理沙は自前の箒に跨がった。魔法で作った灯りを消し、小悪魔が働いている明るい方へと柄を向ける。いつもならかなりのスピードで飛ばす魔理沙だが、これだけ暗いと棚にぶち当たって悲惨な感じになるのが落ちだ。痛いのは嫌だ。
何故かむんむん唸りながら仕事をしている小悪魔が見えてきたので地に足着けて、話しかけようと片手を挙げ――――られなかった。
「ちょっとリトルー！　これこれ見て見て面白いもの見つけたー！」
病弱喘息持ち設定はどこに行ったのか、パチュリーは全速力で扉を開けて小悪魔のもとへ走り寄って来ると、手に持っていた本を不思議そうな顔の小悪魔に投げつけた。魔理沙は暗がりに一歩下がって、事の成り行きを見守ることにする。今出て行ってもあまり意味が無いので。
「痛いですよマスター。顔面は辛いです」
「言ってくれれば痛覚くらいいつでも切ってあげるわよー」
「遠慮しておきます」

「それよりこれをどう思う？」
「凄く……大きいです……。って何やらせんですか」
小悪魔は相変わらずの主人の奇行に半ば呆れながらも、パチュリーの差し出す本を受け取ってひっくり返してみる。こっそりと様子を窺っている魔理沙が息を飲んだ。
「これは……魔理沙さんの持ち歩いている魔法書に装丁が似てますね」
魔導書とは、魔法使いの研究についてまとめてある本の事だ。薬品を混ぜたり、新しい魔方陣を試したりした結果を、成功失敗どうあれ書き記す。本は暗号化され鍵か無いと読めないようになっている、上に普通は他人の本を盗み見たりはしない。
「に見える偽装書よ。中身はなんと日記なの！　中が気になる？　気になる？」
「マスターまたキャラ変したんですか？　前回の方がまだマシでしたよ」
「そう？　咲夜も何か引いてたし、元に戻そうかしら」
と言いながら、パチュリーは特に躊躇せずに本を開いた。
（ぎーやー！！）
魔理沙は小声で悶える。じたばたと暴れるが、勘づかれないように無音。今すぐ飛び出すべきかを頭の中で検討して、パチュリーの良心に頼る事にする。
「ふんふん、『〇月×日、森の奥で真っ白な茸を発見。採取しようとしたところアリスが邪魔してきた。ムカついたので吹っ飛ばしといた。自称都会派の癖に。　〇月△日、霊夢の賽銭箱に香琳堂から持ってきたオモチャのお金を入れてみた。半殺しにあった。拗ねて羊羹を奪ってみた。半殺しにあった。』ろくな事してないわねー」
「子供の悪戯日記ですかね？」
「『×月×日、なんとパチュリーの蔵書に官能小説が混じっていた。借りて来て読んでみると凄いマニアックな内容だ。家に篭って読んでいる内になんだか体が変に――――』」

「パチュリーぶっ殺ぉすっ！！」
魂からの叫びと共に、魔理沙は黒いとんがり帽子の中から愛用のミニ八卦炉を取り出すと、裏切り者である魔法使いへと駆け出した。

零崎人識が蚊帳の外、彼女は泥棒ではない（後書き）

最初の理論はスルー。

見事に戯言関係ないっす、

なんてこったい。

あと、パチェのキャラ崩壊がぱねえ。

空白、彼の来た原因（前書き）

短いです。
特に意味もないです。

空白、彼の来た原因

轟音に館が震える。今が夜中である事を考慮すれば少々近所迷惑だが、そんな事を心配する輩は客人含め一人もいないだろう。どうせ近所には氷精がいるきりなのだから。ついでにその氷精は騒ぎ等気にはせずに爆睡している。

人識は、突然始まった騒ぎに一度体を起こして、また横になった。自分には関係のない騒ぎにわざわざ首を突っ込む必要はあるまい、と頭を枕の下に入れる。

「寝る」

宣言通り彼は寝た。清々しいほどの寝つきっぷりだ。

我関せずと眠ってしまった彼は置いといて、図書館の騒ぎは激化していた。割かし本気でパチュリーを吹き飛ばそうと魔理沙が弾幕を密に配置するが、パチュリーはふざけた調子で避け続ける。あまりにも反省の念が見られない為、魔理沙は難易度をルナティックに引き上げての攻撃だ。

咲夜はそれを面倒臭そうに見ていた。後の掃除が大変だな、と思いながら、特に手は出したりしないで立っている。

「ふざけんな、何で読んじゃうんだよ！　他人の魔術書は読んじゃいけないんじゃなかったのか！？」

「そんな規則存じ上げないし、貴方の魔導書くらいなら簡単に読めちゃうし。大体、魔術書でもなんでもないただの日記じゃない。何か不都合でも？」

「不都合だらけだろ！」

咲夜には犬も食わない種類のいがみ合いに見えたので、隣に来た小悪魔と片付けの段取りを決めていた。

図書館より少し移って三階、執務室。主人のレミリアは今はいない。遠くに騒ぎが聞こえるが、近くに妖精メイドたちはいないのかひっそりとしている。開け放たれた窓からは月光を孕んだ宵風が侵入り込み、机の上のメモ書きが揺れていた。

そこに誰かが佇んでいた。唐突に、闇に染み出すように現れた誰かさんはゆらゆらと陽炎のように揺らめく。机の上の紙を手にとって低く笑った。

「殺し名序列第三位零崎一賊、ね。一応壊滅したらしいけど、さて、どうかしら」

誰かは卓上のメモ書きの上にコピー用紙を重ねて置いた。題名は『零崎人識身辺調査』。幻想郷にある筈のないコピー機で印刷された紙には、今はベッドで爆睡している彼の写真――――隠し撮りなのか画質が妙に荒い――――が貼ってある。

「引っ掛かったのがよりによって零崎なんてね。何の冗談かしら。下手な嫌がらせ？」

誰かは月明かりに人識の写真を見ると、現れた時と同じく唐突にいなくなった。後には風に揺れるコピー用紙しか残らなかった。

零崎人識がボディープレス、だんだんネタが無くなってきたのぜ（前書き）

てーれっててー

零崎人識がボディープレス、だんだんネタが無くなってきたのぜ

翌日。

「おっはよー！」

「うげはぁ！？」

少女、いや幼女のボディープレスで目が覚めるという二次元オンリーの非現実的経験を積んだ人識は、とりあえず己の腹に乗っている金髪少女を追い払う。意外と素直に避けてくれた。少し崩れた髪形、可愛らしいデザインのパジャマ、どう見ても寝起きです。

「おはようぜろりん！　ムカつく天気だね！」

人識は遮光カーテンをちょっと開けて外を見てみる。雲一つ無い空、太陽は半分の半分だけ上がった位置にいた。確かに晴天だ。

「……っていうか、いくら他人ん家つったって俺が油断したりする筈がねぇんだが、何で普通にボディープレスかましてくれちゃってんの？　もしかして俺の戦闘スキルも錆びたか、もしそうなら結構傷付くなぁ」

「おーいぜろりんはまだオネムですかー、起きて起きてよう、私ちょっと辛いけど起きてるよ、だから起きてー」

「だあっ！　うっせ！　起きてるっつの！」

ベッドを揺さぶるフランを蹴散らして、人識は起き上がった。若干眠り足りないが、人一人乗せたベッドが新種のアトラクションばりに前後左右している状況で二度寝出来るような猛者はいないだろう。はい、起きましたよー、と呟きながらベッドから降りる。欠伸を噛み殺して、肩にかかる髪を結おうとしたが髪ゴムが無い事に気が付いた。

「咲夜が呼んでたよー」

フランはそう言い残して出て行った。人識は朝からテンション高

い奴がいなくなってちょっとほっとする。長めの髪はそのままにかけといたジャケットを羽織って、顔を洗いに行こうと考えた。
人識は廊下ですれ違った羽の生えたメイド服の女の子に洗面所の位置を聞いて顔を洗ったり寝癖直してから、咲夜を探した。一階の大きな長いテーブルのある部屋の扉か半開きになっていて、話し声が聞こえるので入ってみる。
全身黒づくめの金髪の少女が席について、だれていた。おかしな尖り帽子を横に置いて、千切ったパンを口に運ぶ。目の下には隈が出来ていて、いかにも疲労困憊といった感じだ。
「長距離マラソン完走後ってこんな感じ……、マラソンなんてしたこと無いが。あー、くそ、パチュリーめ。何が『ららら終末がやってくる！　ただし箱庭、みたいな！』だ、意味分からん」
「いいから早く食べちゃいなさい。フランお嬢様に見付かると帰れなくなるわよ」
「勘弁してくれ。徹夜でおいかけっこしてたんだぜ？　今からフランの相手してたら倒れちまう」
言って魔理沙は野菜スープを飲み干し、白いご飯が食べたいぜ、と呟いた。指を鳴らすと部屋の端に立て掛けてあった箒が手元まで飛んでくる。それを見て人識は、ここにはまともな人間はいないのかと思ったけど、彼も言えた義理ではない。
「ご飯サンキューな、咲夜。そいじゃ私はこれにて……ってお前誰だぜ」
人識に気付いた魔理沙は目を細めて彼に近付くと、頬を人差し指でぐりぐりしながら悪どい笑みを浮かべる。遊び道具を見付けた子供の顔だ。幻想郷の人達は面白い事は大歓迎である。
「よおよお外の人、紅魔館なんかにお世話になってるのか。永遠亭の方が面白いぜ、行ってこんがり焼かれて来いよ。あそこはいい焼き鳥がいるんだ」
「なんで焼き鳥が生息してるんだ、どんな日本語の使い方だよ。後ほっぺをぐりぐりすんじゃねぇ」

「あんだよ、焼き鳥くらい普通だろ。あそこには焼き兎もいるんだぜ？　まあ、能動と受動の違いはあるけどな。魔理沙さんは暇じゃないからしばらくはそっとしておいてくれよ。宴会となれば話は別だぜ」
「暇じゃないなら俺のほっぺたぐりぐりを今すぐ止めて帰れ！」
わっかりましたー、と適当な返事をして魔理沙は漸く人識から手を離す。にやにやと笑みを浮かべたまま彼女は去っていった。右手に箒、左手にはぼろぼろになってさまった本を抱えていた。
「……なんだあいつ」
「猫泥棒ね、もしくは一人爆窃団でも可。おはようございます昨日は良くお眠りでって言うかちょっとは気になったりしないのかこの客は一応女の子だらけの館に一人で泊まりな上にあんだけ騒いでんだから起きてきたり眠れなくなったりしろ」
「昨日とは随分とテンションが違うじゃねえか、ついていけねーって」
「朝からあんなの相手してたから、当てられたのかしら。朝食を用意するから座ってて。パンとスープだけだけど」
言われて人識は長いテーブルの端の方に座る。座った途端に目の前に料理が前ぶれなく現れたので驚いた。咲夜が時間を止めて持って来たという彼女にとっては当たり前な行動なのだが、人識からしてみれば何故わざわざそんな面倒な事をしているのか分からない行動だ。１００メートルを１４秒で走れたとしても、常に全力で走っていたらばててしまう。実際は咲夜が時間を止めるのに要する労力は腕を一本挙げる程度なのだけど。
「なんかなぁ……」
献立はロールパン、野菜スープ、チーズ片。欧州田舎の夕御飯みたいだ。まあ、幻想郷も十分田舎か。
人識がありがたくいただきますをしてから食べ始めると、同時に身なりをきちんと整えたフランが部屋に入って来た。咲夜は元気無くテンションアゲアゲな彼女に

「遅かったですね、先ほどまで魔理沙がここで食事してましたよ」
等とは言わずに、ただ
「おはようございますフランお嬢様。今日はとても早起きですね」
とだけ言った。角の立たない柔らかな言い方だった。
「早いって言うか遅い、ね。昨日は眠れなくて。凄いうるさかったけど、またパチェが爆発でもしたの？　メイド達も騒々しいし。とりあえずご飯頂戴」
フランはいつもの指定席（さっきまで魔理沙が座っていたとこ）ではなく人識の隣の席に座った。テーブルが無闇に長い為、隣と言ってもお互いに手を伸ばさなければ届かない位遠いが。
フランが席に着くと、魔法のように料理が目の前に並ぶ。驚いた事に人識と同じメニューだ。違うのはワイングラスに満たされた赤い液体位か。
人識はちょっと興味があってフランが食事する様子を見ていた。鬼と言うからにはさぞかし何かしでかすのだろうと考えていたのだが、何か普通だ。フランはちょっとスープを飲んでパンにチーズを乗っけて食べてから、ワイングラスを一気に飲み干すと口直しにパンを口に詰め込んでスープで飲み下す。
「何か、苦い薬を飲み下す子供みたいな食い方するんだな」
「んー、だってこんな保存パックのなんて不味いだけだもの、私の好みじゃないし。新鮮じゃなきゃ美味しくないの」
そう言うフランの口からは鋭い犬歯が覗いていて、おお吸血鬼らしいなあ、と人識は暢気に思った。ついでにスープを飲み下して丁寧にごちそうさまをした。
「今日は貴方を神社に連れて行きます。まだ帰らないとしても一度は顔を出しておいた方が良いですから」
「はい、私も行きたいです！」
「いいですよ」
「うん、そうだよね。外に出る時はお姉様と一緒じゃなきゃ、……
……っていいの！？」

うっひょー、とフランは喜びを表す為駆け回る。いつの間にかご飯は食べ終わっていて、食器は既に片されていた。

零崎人識がボディープレス、だんだんネタが無くなってきたのぜ（後書き）

朝一でフランちゃんにボデープレスされるとは、
なんとうらやましい！

妄言は置いといて、なんか皆キャラブレしまくりやね。

零崎人識が竹林入り、あの筍の始末には困った（前書き）

特に無いですね

零崎人識が竹林入り、あの筍の始末には困った

割りと遠かった。
「飛んでくれば直ぐなんだけど、貴方は飛べないからね」
「なんか、いっぱい、いた、な」
「ぜろりん大丈夫？」
陸路で森を抜ける道中、人識が外の人間だと嗅ぎ付けた妖精や低級妖怪達がやたらちょっかいをかけてきて、さながら異変時の三面のような有り様、と言うか弾幕だった。二人は終始飛んでいたが、人識は逃げ場の無い地上での回避を余儀なくされ、息が切れてぜーぜー言っている。
兎角、無事二名と満身創痍一名は博麗神社に到着した。社にはいつも通りに境内の掃除をする素敵巫女さんがいた。
「あら、珍しい組み合わせ。妹様はいつから太陽の下に出てくるようになったの」
ちなみに、フランは日焼けを防ぐ為日傘をさして日焼け止めクリームを塗っている。ついでに、人識はサングラスをかけていた。
「今日からよ。ところで、彼は外来人なんだけど」
「見れば分かるわよ、流石にそんな格好してたら」
「なんだけど、社は開いてるかしら？」
赤と白の巫女服にポニーテールな博麗霊夢は暫く考え込んだ後、人識のサングラスをとって顔を覗き込んでくる。無意識なのか、妙に顔が近い。人識はガンを付けられているものと解釈して殺気を出さない程度に睨み付けた。
「……ふうん、なるほど」
意味あり気に呟いて身を反転させる。片手で人識のサングラスを弄びながら数歩離れて、こちらを軽くみた。

「残念だけど、結界に穴が空いちゃってね、修復で忙しいの。それに穴開きのまま社を開けると結界そのものが役に立たなくなるかも知れないから、暫くは無理ね」
幻想郷は『博麗大結界』に覆われた人識のいた世界とは位相のずれた箱庭である。位相違いの所為で触れることは出来ず、箱庭であるが故にその区間は限定される。何年も前に初代博麗の巫女ととある大妖怪によって区切られた幻想郷は今日まで崩れず外からの来訪者を受け入れている。
「大体一ヶ月か二ヶ月くらい必要ね。修復した後に安定させなきゃいけないから」
「暇なんだからもっと頑張ればいいのに。ところで今から里まで行こうと思うんだけど、大丈夫かしらね？」
「えー、妹様は、もしかすると入り口でお節介半獣に止められるかも」
人識はまとわりつくフランを引き離しながら二人の話を聞いていた。それから、今朝魔理沙が言っていたのを思い出して呟いた。
「なあ、永遠亭って、どういう所だ？」
「あー永遠亭ね永遠亭。あそこなら妹様も追い返されないんじゃない。なにせ自己修復機能付きだからね」
「……そうね、あそこにもお節介さんがいるから一人でも大丈夫でしょう」
人識は一人とはどういう意味かと首を傾げる。咲夜が一人で階段を降りていったが、隣のフランが追いかけないので何と無く人識も追いかけずに立っていた。特に何か決まった訳ではない筈だが、人識とフランは二人残される形になってしまって顔を見合わせる。
「よし、じゃあこの私が迷える二人を送り届けてあげようじゃないの」
なんだか恩着せがましく巫女はそう言って二人の前に立って歩き出す。人識はどこに行くのか分からないままに背中を追いかける事にして、フランはその人識の背中に隠れるようにしていた。

長い階段を降りて里横の竹林に入る。鬱蒼と繁る竹は好き勝手な方向に生えていて迷い込んだ者を惑わせる。霊夢は迷いの無い足取りで進んで行くので二人はただついて行くだけだが、人識にはもう大まかな方角すら見失いそうになっていた。
「永遠亭ってのはどの辺りにあるんだ？」
人識はかなり前に兄弟三人で山登りをした時の事を思い出していた。そう言えば、あの時は兄貴が大量の筍を持って来たんだっけか、と懐かしく思う。今は筍の季節ではないが。
「竹林の真ん中からちょっとずれた所。十七本目の竹を右、とか言ってたけど怪しいもんね。どこから十七本なのかも良く分かんないし」
「十七本？」
「要するに迷ってるのよ」
霊夢は迷いなく歩を進めて行く。
「いやちょっと待てよ。迷ってんなら足を止めろ。飛んで空からでも確かめろ」
「それだと負けた気分になるでしょ。それに、多分こっちで合ってるから大丈夫よ」
「多分かよ。アバウトだなぁ」
「幻想郷の人なんて大体そんな感じだって、一々気にしてたら禿げるわよ」
見も蓋もない事を言って霊夢は口を尖らせた。呆れて立ち止まる人識の肩を叩いてフランが追い越す。
ある意味で平和呆けしている幻想郷の住人には分からない事だが、普通は迷ったら少し位は慌てるものだ。野良妖怪に襲われても対応出来ないから里の人間はもう少し注意深く行動する。なにせ通り魔より危険なものが闊歩している世界だ。道に迷ってあちこち彷徨いている内にとんでもない所に迷い込むとも限らない。
だがＲＰＧの勇者だってレベルが半分を越えてからは頑張れば大概の者は倒せるだろう。実質弾幕レベルが相当な霊夢やエクストラ

のフランがいる現在のパーティーなら魔王くらいなら倒せるだろう。
立ち止まった人識が何気無く後ろを振り返ると、やや後方を白髪の女の子がついて来ているのが見えた。心配そうで怪訝そうな目が人識とかち合う。そいつは暫く挙動不審に視線をさ迷わせていたが、覚悟を決めたように一つ頷くと近づいて来た。
「外の人間がこんな所で何してるんだ？　今は筍狩りの季節じゃない。それとも初夏の陽気に頭でもやられたのか？」
「いきなり失礼な事言うじゃねぇかよ俺の頭がやられたら大事な器官が欠損して人間を失格するどころか製品として欠陥になっちまうだろ、と言ってもあんたとは初対面な訳だから俺は寛大に聞き逃してやろう。あんたは誰だ？」
「どっちが失礼？　私は藤原妹紅、ここで迷子の案内とかしてる」
迷子。人識は首を傾げて、自分達の事かと納得した。案内人が不出来な為に現在は恐らく無駄な行程を踏んでいた筈だ。この全身真っ白赤リボン女が道案内してくれるならどんなにか良いことか。
「な、永遠亭とやらがどこにあるか知ってるか？」
「あー、知ってるけど」
妹紅は何だか苦い顔をして力無く笑った。
「行きたいなら連れていってあげるけど？」
「ん、いいんじゃねぇのかって、お？」
振り返って見ると、人識の後ろにはフランだけがいた。手を上げて妹紅の周りをぐるぐると回りだしたフランを掴まえて、紅白巫女はどこへ行ったのかと訊くが要領を得ない。紅白は人識が立ち止まったのに気が付かず一人で先に行ってしまったのだが、フランは声もかけなかったのだ。
「やあやあ妹紅お久しぶり死ね！」
「またあんたか。今日は気分じゃないんだからやらないぞ」
「……ま、いいか。後で礼でも言っときゃいいだろ」
と、いうわけで。霊夢は早々に退場です。

零崎人識が竹林入り、あの筍の始末には困った（後書き）

紅白さんはボケやろうっすからねー。
ある意味、最強のはずなんだけど。

ちなみに
ぜろりん　Ｌｖ８２
さっきゅん　Ｌｖ７８
れーむ　Ｌｖ８７
フラン　Ｌｖ９５
ってかんじだと、個人的に思う。

零崎人識が永遠亭着、永遠亭って兎ばっかり（前書き）

兎耳増量でお送りいたします。

零崎人識が永遠亭着、永遠亭って兎ばっかり

親切かつツンデレ気味なエクストラ少女に案内してもらって、二人は永遠亭へ着いた。あまり関係無い話だが、フランは人識と妹紅の回りを終始回っていた。元気が有り余っているのだろう。人識は古風な屋敷を見上げて、ため息を吐いた。

妹紅は早々に退散しようとしていたが、外来人と引きこもりではコミュニケーションが取れるはずもなく、首筋を捕まれて強制的に門前へ立たされた。

「言っとくけど、私、ここの主人と仲が悪いから門前払いされるかもだからね」

「少なくとも俺らが顔出すよりはいいだろ」

「きゅっとしてどっかーん」

「……分かったよ」

門に据え付けてあるノッカー（兎）を鳴らして数秒、厚い扉から兎耳を着けた高校生くらいの少女が顔をだした。

「はーい、永遠亭に何の……侵入者だー！」

敷居を跨いでもいないのに侵入者扱いされた三人は応対した兎を扉ごと蹴飛ばして中へ入る。つい蹴飛ばしてしまった兎は堪えてすぐさま立ち上がり、行く手を塞いだ。

「待てーい！　客なら客らしくしなさいよ、追い出すわよ！」

雄々しくも、ちゃっと指を鉄砲型に伸ばしてこちらへ向ける。直後に、足元に突然空いた穴へと彼女は落ちていった。悲鳴が小さく聞こえる。

「もこたんちっす、見知らぬ方々もこんちゃ」

藪から飛び出した兎耳の少女が気だるげに片手を挙げる。妹紅は応じて手を挙げて、心配そうに穴の方を見た。

「なんか、兎ばっかじゃね？　ってかなんで獣耳？」
「妖獣だからじゃない？　よく分かんないけどー」
フランは日傘をくるりと回した。
「アバウトな。お前は一応幻想郷の一員じゃないのか」
「私ひっきーだもん」
てゐは妹紅の前に立って歩きだした。人識とフランはその後をぽけぽけとついていく。
人識は所謂立派な日本家屋に感心した。現実に、ここまできちんとした屋敷はもう無いだろう。和洋折衷が基本になるからだ。玄関では安全靴二人組が若干手間取ったが何事もなく。あちこちから覗く兎を横目に長い廊下を通り抜ける。
「ししょー、客ですよー」
客間に通された。座布団に座って待つことに。てゐはお茶も出さずに妹紅の隣に座って、ちゃぶ台に突っ伏す。フランは虹色の羽をぱたぱたとしながら、人識の隣に座った。
しばらくして、白衣を着た背の高い女の人が現れた。長い銀髪を後ろで一つにまとめた、どちらかというと現代の疲れた医者のようだ。事実、目の下には隈が出来てる。
「はい、ご用件はなんでしょう……ってなんだもこたんじゃない。そっちは紅魔館の吸血鬼？　隣の君は？　外の人かな、珍しい」
珍しいというよりは珍妙だと言いたげに切れ長の眼を細める。それから大きく欠伸をした。
「姫様が色々やらかしてここ一週間ずっと仕事してたから、眠くて眠くて。いっそのこと、残機でも減らしてくればいいのかしら」
ちょっと頭をすっきりさせてくると言って八意永琳は部屋から出ていった。いや、正確には出ていこうとした。
「へい、手伝ってあげるぜ！」
テンション高くフランは永琳を呼び止めて、
ぐしゃ

零崎人識が永遠亭着、永遠亭って兎ばっかり（後書き）

フランちゃんってば激しいぜ（照）
みたいな？

よく分からん。

零崎人識が衝撃新事実、なんつーチート（前書き）

ぐしゃ

の後からになります。

零崎人識が衝撃新事実、なんつーチート

「……うわぁ」

正直、彼の口からでた感想はこれだった。これしか言えなかった。これ以外言いようもなかった。

フランは呼び止められて振り返った永琳の胸めがけて抜き手を放った。ただの人間なら突き指して終わりそうな抜き手だ。だが、そこは吸血鬼。永琳の胸骨とか背骨とか心臓とか諸々を破壊して、彼女の胸に大きな風穴を開ける。無論、死亡。

フランは特に感慨も込めずに腕を抜いた。彼女の腕も骨が折れて見るに堪えないような状況になっていたが、そもそも血だらけなのでよくは見えない。手を伝う血を舌でなめとって、不味かったのか顔をしかめる。

壮絶なその光景に、人識はナイフを直ぐに抜けるように身構えながらフランの様子を伺っていた。ぶっ飛んだ奴だとは思っていたが、いきなりこういう事をするなら一言言っておいて欲しい。おかげで随分と驚いた。全く、こいつの唐突さは誰かさんを思い出させる。

すわ皆殺しか、と人識が構えたのと同時に、信じられない事が起こった。

「……っのクソガキめ。せめて返事くらい待ってからにしなさいよ」

いつの間にか、永琳は立ち上がっていた。傷一つ無い綺麗な姿でため息を吐いてみせる。

「あーあ、死んだ死んだ」

「っいや、待て！　なんだ今の！」

気付けば、辺りに飛び散った筈の血痕も充満していた血臭も、全

てが消えていた。フランの腕も破れた裾以外には変わった様子も無い。
「大嘘つきかこのやろう、幻想郷(ここ)は人外魔窟か理不尽の巣窟か！？」
「気持ちは分かるから落ち着けよ。後、そのネタは案外ギリギリだ」
妹紅にそうたしなめられ、人識は浮かしかけた腰を落ち着けた。横にフランが座る。永琳は意外とすっきりした顔をしててゐの横に座った。ところで、この因幡の兎は師匠が瞬殺されてる最中は部屋の隅で頭抱えて震えるのみであった。
「外の人にこんなの見せたら一週間は寝込むわ。まあ、君は堅気っぽくないから気になんてしないけど」
「堅気じゃなくても寝込むっつーの」
殺しがいが無さすぎて全殺し名から拒否られそうだ。
「死んだよな、確実に。ありゃ俺の幻覚か？」
「んにゃ、ぜろりんは間違ってないよ。どっちかって言うと間違ってるのはあいつら、生物学的に。殺しても死なないなんてチートだから」
「不死じゃなくて不滅ってとこか。私と永琳、それからここの馬鹿お姫様は形状記憶自動リカバリー装置搭載の人間なのさ」
それは彼女が暇潰しにと作らせた薬。命の法に触れた彼女達は理から永遠の追放を受け、二度と戻ることは出来ない。それが、彼女達の罪。
自嘲するように笑って、妹紅は肩を竦めた。特に気にはしていないと示すように。まあ、人識は気になりまくって逆に気にしないみたいな状況に陥っていたが。
「“暴力の世界”の連中も大概人外だったが、流石に不老不死は……ああ、いたんだっけ」
厳密には不死ではなかったけど。
「ん、ちょっと待てよ。って事は……お前ら何歳よ」
「女子に歳を聞くのは失礼、と言いたい所だが、曖昧でいいなら答えようか。多分千五百はいってるんじゃないかな、二千はいってな

いと思う」
「あー、多分それくらいね」
適当に答えた妹紅に応じる永琳。いつの間に這い上がって来たのか、鈴仙の入れたお茶を旨そうに飲む。
「マジかよ、仙人？　千五百年も前なら何時代よ？」
「ちなみにねぜろりん、私は五百歳ー！」
「ババアじゃん！？」
人識は頭を抱えた。何だこの人外魔窟。っていうか五百歳ってババアどころじゃねえ。ちなみにちなみに、机に突っ伏してるてゐは紀元前産まれだ。遠い昔に鮫を渡ったかの嘘つき兎である。
人識の隣に座るフランはどこからどう見ても少女でしかない。更に正面の二人も、とても歳のいった長寿婆さん（ぜろりん超失礼だぜ☆）には見えない。つまりはあれか、この作品はフィクションであり登場人物は全員１８歳以上ですってか。そんな馬鹿な。
若干混乱気味に呻いて、人識は理解を放棄した。気にしたら禿げる。
「それで、何の用だったの？」
「用って訳じゃないんだ、黒い奴が永遠亭は面白い場所だって言ってたから」
魔理沙か、と皆頷いた。

零崎人識が衝撃新事実、なんつーチート（後書き）

大嘘つき（オールフィクション）に関しては・・・

うん、まあ、別にいいよね？

ところで不老不死って、塵も残さず吹き飛ばしても死なんのか？

零崎人識が竹を取るに、竹取物語？（前書き）

短い。

零崎人識が竹を取るに、竹取物語？

「せっかく来たんだから色々見ていったら？」
「色々？」
「……そう言えば、外の人間が必ず見て驚くものがあるのよね」
「はいはい、私それ見たいー。ぜろっちも見たいよね？」
「いや別に。てかぜろっちって」
「見てけばいいじゃないお洒落頑張ってっぽい外来人さん。あなたの格好って今までの人より過激よね」
「うちの姫さんのいー暇潰しになるかもよー。最近退屈だって言ってたしー」
と言う訳で、人識君の永遠亭見学。
永遠亭の連中はエイリアンである。正解には三人、鈴仙と永琳、それとここの主人の輝夜。詳細は永夜沙をプレイしてもらうとして、彼女達は元は月の住人なのだ。月には地上とは全然違う技術があり、地上の繁栄とは無関係に隆盛を誇っている。しかし、地上に追放されてしまった彼女達は戻る事もせず、戻ろうともせずにここで暮らしている。
その追放の因となったのが、永琳の作った“蓬来の薬”であり、彼女達が地上に降りて来た時の話が“竹取物語”なのだ。が、人識はあまりそういう事には興味は無いのだろう。鈴仙が一生懸命にそういった背景を喋っていても、全く興味無さげにフランと話していた。永琳は主人とやらを呼びに行ったきり戻ってこない。
「その時師匠が姫様に言ったんですよ。罪滅ぼしを、……ってあなた達聞いてないでしょ」
「え、そんなんなってんの。吸血鬼って結構チート？」

「チート感は否めないかな。妖怪の中では人間を簡単に仲間にできる種族は珍しいって聞いたし、力も強いしね」
「ちょっと卑怯だな」
「だから聞けってて言ってるじゃない！　終いには私もキレるわ！」
鈴仙はちゃぶ台を控え目にひっくり返して叫んだ。一生懸命話してやってんだから少しは聞けよと。
「いや、なんかさ、お前からは妹的なＪｋ臭がするんだよな。あいつと似てる奴になんて関わり合いになりたくないんだよ」
「あ、妹いるんだ？」
「……んー」
妹かなぁ、と人識は首を捻る。妹だけど妹ではない、血が繋がっていないニット帽ＪＫの事を思い出して少し顔をしかめた。
「伊織ちゃんの事はいいって。それで、輝夜姫は分かったがあんたは？」
「え、私？」
「一応聞いてはいたんだねーぜろっち」
「月の兎は何してんだ、餅でもついてんのか？」
月では兎が餅をついていると日本では古来から言われている。ちなみに中国では蟹、欧州では女の人の横顔と言われているが、それは兎に角。
「えー、うん、まあ、そんな感じ」
月面戦争最前線では餅なんてつかないが。木槌を握った事より銃弾を撃った事の方が多かった鈴仙は餅つきの仕方すら忘れかけだ。だから、誤魔化し笑いを浮かべながら心の中で舌打ちをする。師匠はまだ戻ってこないのかと部屋の出入口に目を走らせた。
丁度その時、どたばたとした足音が聞こえて、長い廊下に通じる襖が一息に開け放たれた。一同が注目すれば、そこには仁王立ちで般若面を着けた永琳が、
「「「何でだよ！」」」
鈴仙、妹紅、人識の突っ込みを一身に食らって自分の状況を思い

出したのか、永琳は慌てて面を外した。そして何事もなかったかのように笑みを浮かべる。
「姫様を呼んで来たわ」
「師匠さっきのお面は……」
「何でもないわ」
「いや、でも」
「何でもないわ」
鈴仙は身の危険を感じて口を閉じた。あまり突っ込むとろくな事にはならない。そう思って、首を振る。永琳は開けた襖を振り返り、笑顔で声をかけた。廊下から布の引き摺る音が聞こえて、足音が近付く。
姫様と言うからにはドレスとか着物でも着てるんだろうかと思いながら人識が眺めていると、衣擦れの音も高らかにその人物は部屋へ入って来た。十二単的な裾の長い着物。古風に伸ばされた長い黒髪。そして先程の永琳と同じように、その人物は嫗の面を、
「「「だから何でだよ！」」」
しかもその人物は永琳とは違い堂々とした足取りで部屋の中央へ歩を進め、てゐが突っ伏す机に足を取られて派手にスッ転ぶ。転び方も堂々としたもので、机の上にスライディングでもしたかのようだ。
「くっ、足元が見えないとは大誤算ね。せっかく外の人間を驚かせようと思ったのに」
「いや、俺は十分驚いたぞ？」
「そういう問題ではないの！」
謎の人物は机の上で暴れる。机がガタガタ揺れている横でてゐは突っ伏したまま微動だにしない。実は大物なのか。
「目的が達成されても認めたくない時だってあるのよ！　まあ、今は正直どうでもいい気分だけど！」
幻想郷の連中は実にアバウトである。しかも、ここに来た人の大半はアバウトになってしまうというおまけ付き。果たして人識はこ

のアバウトさに引き摺られてしまうのか。多分、ない。
　嫗の面を着けた着物姿の女子が暴れて埃を舞い上げているのを見かねた妹紅が立ち上がり、机の上から転がり落とす。角に後頭部をぶつけて鈍い音がしたが、その人物は特に気にした様子無く無造作に身を起こした。面を外して胸を張り、叫ぶ。
「と言うわけで、貴方暇潰しに付き合いなさい！」
「俺、忙しいんで。よしフランちゃん、あのメイドさんを探しに行こう」
「いいけど道分からなくない？」
「しまった、そんな罠が」

零崎人識が竹を取るに、竹取物語？（後書き）

大変だ、醍醐さんだ。
予想より遥かにローペースだぞ。

空白、外の世界の流行（前書き）

さっきゅんとチルノです。
厨二です。

空白、外の世界の流行

気まずい。居心地悪いとか、そういうレベルじゃない。人識の隣のフランは特に気にはしないのか暢気にお茶を飲んでいる。
「……それで、ホームレスが一体何の用」
「あんたに用なんて無いよ、ちょっと自意識過剰なんじゃない？」
架空の火花が元お姫様と元お嬢様の間に散る。ついでに殺気も駄々漏れ。てゐも鈴仙も既に退却しており、永琳は我関せずと本を読んでいる。
「誰が自意識過剰なニートよ！」
「この蓬莱ニートめ、いい加減私を見習ってきちんと生きたら？」
「あんたこそ、私を見習って毎日風呂に入ったら？　この竹林ホームレス」
「風呂くらい入っとるわ、ぼけ！　面倒になって“死んだ”りなんてしてないんだからな！」
加熱する争いから目を背けて永琳に目を向ける。本から顔を上げた彼女は人識の方を見やって、肩をすくめた。
「ただの痴話喧嘩だから気にしなくていいわよ」
「「誰が夫婦か！」」
実に息が合った突っ込み。もうお前ら結婚しちゃえよ、と永琳が呆れて呟いた。二人は顔を突き合わせて唸っている。
さて、特にする事も無くぼんやりとしている人識とフランだが、一方その頃里に買い出しに行った咲夜はといえば、
「ふっ、あたいの目はごまかせないぜ、メイド長さんよ！」
質の悪い氷精に絡まれていた。いつもの青いワンピースを伊達ワ

ル風に着崩して（着崩して？）、上から黒い裾の短いコートを羽織っている。咲夜はため息混じりに聞き返した。
「何の事？」
「とぼけてもムダさ。あたいは蒼の絶対零度こと？（チルノ）。ガイアがささやくのさ、おもしろそうなことは逃すな、と」
　さしもの瀟洒メイドの咲夜も言葉を失わざるを得なかった。どこでそんな知識を仕入れてきたのか見当は付かないが、とりあえずこのままだと彼女の長い、長過ぎる人生（妖生？）に黒歴史が生成されるとも限らない。いや、もう出来てしまっているかもしれないが。
　という訳で、用事は後一つ残っているから咲夜自身は何とかしてあげる事もしてあげようとも思わないが、せめて何とかしてくれる人の所に連れて行ってあげようと思った。絶対の氷点下（アイスボックス）（触れたものは全て凍り付く。相手は死ぬ）とやらを振り回す困ったちゃんを引きずって寺子屋へ連れていく。
「知ってるか、乾いた水（ドライアヘン）はな、ふれると人傷するんだぜ！」
「それは人傷ではなく火傷な上に水じゃなく氷だしドライアヘンって何なんかの麻薬？　しかも、火傷じゃなくて凍傷、傷口見ればわかるでしょうが。っていうかその変な知識の出所はどこかしら。知りたいような知りたくないような」
「だてワル、だってワル♪」
　絶対意味が分かって使っているわけではないのだろう。寺子屋の先生である慧音も不審そうな顔でおかしくなった教え子を見ていた。
「……チルノ、意味分かって言ってるのか？」
「赤いチビが、こう言うとかっこいいよって教えてくれたんだ。外ではやってるみたいだよ」
　赤いチビ＝紅魔館の紅い人＝咲夜のご主人。
「なんか、すまないわね」
「ネーミングセンス（笑）ってなってるからな、紅魔館とこのお嬢は」
「凍符『エターナルフォースブリザード』！」

「やめろ」

空白、外の世界の流行（後書き）

シュタゲネタって伝わらなくても面白くないと駄目だというのは
分かってはいるんだけど。
面白そうだからやった、
今は反省してる。

零崎人識が竹林出、大厄ゲームが分からなくても気にはしない（前書き）

短い！

零崎人識が竹林出、大厄ゲームが分からなくても気にはしない

「という訳で、勝負よ、貴方！」
「応さ、勝負だ！」
輝夜と妹紅はお互いに指を突き付け合い啖呵を切る。間に人識を挟んで。
「何で俺が巻き込まれてるんだ！」
人識は結構本気の突っ込みと共に二人の脳天にチョップをかましたが、二人には全く効かなかった。人識は心に２６のダメージを負った。
「勝負内容はいつも通り鬼ごっこ！」
「望むところだ！」
「くっ、誰か突っ込め！」
人識からフランにヘルプコール。フランは仁王立ちのまま人識を軽々と引き寄せ、机を音高く叩いた。耐えかねた机がミシミシと不吉な悲鳴をあげる。一同騒然。
「ここに鬼（ほんもの）が二人もいるのにどうして人間だけで鬼ごっこをするだろうか？　いや、しない！」
フランはわざわざ反語表現まで使って仲間に入れろと要求した。そういう助けが欲しかったわけではないんだが、と人識は頭を抱える。鬼ごっこってようするに追いかけっこなんだから飛べない人識は不利以外の何物でもない。
「お前ら鬼ごっこしようぜ！」
「「Ｙｅａｈ！！」」
「ノリがおかしいと思うのは俺だけなのかそうなのか」
ノリに乗った三人に引きずられて竹林へと放り出される。人識は

なんとか飛行禁止の約束を取り付け、能力やら弾幕やらを使用しない平和な鬼ごっこを提示したがそれは却下され若干落ち込んでいた。テンションダウンな人識を余所に三人は盛り上がりを見せている。
「妹紅には負けないわ！」
「輝夜には勝つ！」
「ふふ、お姉様（アイツ）のいない今なら……殺れる！」
互いに睨み合っている輝夜と妹紅が“狐チーム”、別の意味でエキサイトしているフランと人識がペアで“兎チーム”となり逃げ切れるかを競う、らしい。
「あれ、なんか既視感」
っていうか“大厄ゲーム”だった。またしても兎なへたれ殺人鬼である。
ようするに、輝夜と妹紅の勝負になるので（チームも何もないじゃん）人識達はひたすら逃げてれば良いだけだ。“狐チーム”は兎を被弾させたら勝ち、“兎チーム”は逃げ切れれば勝ち。たった四人しかいない上に竹林は広いからリーダー決めとか面倒な事は無し。空飛ぶのも禁止。こうなると地の利がある“狐チーム”の方が有利だが、“兎チーム”は竹林の外に出れば良いだけなので簡単。
「先行は“兎チーム”、三十数えたら追いかけ始めるわよ！」
二人一緒に駆け出す。逃げろと言われたもののどちらに逃げればいいのか判断がつかなかった人識は、なんとなくフランの後ろを追う形になる。前回の山とは違い足場がしっかりしている為走りやすくはあるが、ここは“迷いの竹林”。適当に走り回ってはぐれるとまずい。
今朝の会話から、フランは基本的には一人で外に出して貰えないのだと人識は推測していた。それは、彼女自身が引きこもり気味である事に加えて、あの何でもかんでも破壊してしまう能力にあるのだろう。本人もそれを負い目に思ってか、外に出たがらない。まあ、一歩外に出るとそんなことは忘れてしまうようだが。
「ぜろっち、こっち！」

ぐいっ、と急に手を引かれて転びそうになる。つんのめりそうになりながら、反射的に手を振り払う。特に考えての行動ではなく、それはフランもそうだったのか払われた手を掴み直した。今度は人識も振り払わないで大人しく捕まれる。

「こっちって……、行く宛でもあるのか？」

「宛は無いけど、こっちからなら結構早く出られる。全力疾走！」

兎脱走。あんなにテンション高くはしゃいでいたのに、もう飽きたらしい。

「私持久力無いから全力疾走！」

「俺もあるとは言い難いがそれはどうなんだ」

何はともあれ駆け落ち状態で二人は走り出す――――里とは真逆の方向へ向けて。その事に人識が気付ける筈も無く、ただフランの足の速さ（どう見てももやしっ子なのに凄い速い）と“飛ばない”ルールを守っている律儀さに感心しながら狭い竹の間を縫って走っていった。

零崎人識が竹林出、大厄ゲームが分からなくても気にはしない（後書き）

駆け落ち！！？？
いやいや、まだ早いって。

姉貴に
「ぜろりんは女装だろＪＫ」
と言われたが
常考なのか、そうなのか。
放っておくと迷走の予感。

零崎人識が上海紅茶館、ロンリーアリスの憂鬱（前書き）

会話分多め、
さりげなく地雷を踏み抜くフランちゃん。

零崎人識が上海紅茶館、ロンリーアリスの憂鬱

「あれ、ここどこだろ」
「おいおい」
首を傾げるフランを半眼で睨んで、人識は辺りを見回した。鬱蒼とした森、今は天高くあるはずの日の光も届かない程木々が生い茂っている。薄暗く湿度の高い所だが、日傘をささなくても問題無いからかフランは楽しそうだった。
「零ちゃん零ちゃん、見てほらキノコ！」
「茸は分かった、分かったから俺の顔に菌の塊を押し付けるな切り刻むぞ」
「でもこのキノコ食べれない奴だよ？」
「食う為じゃねーから！」
とりあえず、フランが手にしている不気味な笑い声をあげる茸を叩き落とす。不満そうに落ちた茸を棒でつつくフランを尻目に人識はもう一度辺りを見回した。
一番の問題は、人識には幻想郷の広さがどれくらいか、紅い邸は何処にあるのかが分からない事か。幻想郷を異世界とみなすと、ぽけぽけ吸血鬼と二人きりで遭難しても大丈夫かが悩みどころとなる。大丈夫だとは思うが。
「多分だけど、ここは魔法の森って場所だよ。パチュリーが色々言ってた」
パチュリーって誰だよ、と人識は思った。聞くと、あの邸の図書館（私営？）に引きこもっている紫魔法遣いのことだそうだ。魔法

使いといえば、朝に会った黒白の少女を思い出す。
「このままこうしててもしょうがないし、行こうよ」
「つってもどこに……あ」
「ん、どうかした？　……って、あ！」
どこまでも続くかと思われた木々が不意に開けて日が降り注いでいる所が表れた。急いでフランは日傘をさして、焼けた腕を痛そうに擦る。日は真上、いつの間にか真昼の時間帯になっていたようだ。
今までの森の様子を見た感じ、この辺に人の手が入っていることは確実。更に空き地の真ん中には立派な邸宅が建っていた。二階建ての白い家。
「……えっと？」
「魔法遣いは幻想郷には二人、魔法を使える人自体は何人かいるみたいだけど。その内の一人は紅魔館（うち）のパチュリーで、もう一人が……誰だっけ」
「まあ、名前はいいんだ。とりあえずこの家にはその某さんが住んでいるんだな」
それが分かれば後はいいだろう。若干警戒しつつ、人識は玄関をノックする。生憎インターホンとかはなかった。
しばらくして、ドアが開いた。人識はいつもの通りに口を開こうとして、止めた。
「ああ、思い出した。繰り人形の七色魔法遣い、アリス・マーガトロイドだ。魔理沙の話にしょっちゅう出てくる」
「……こいつがか？」
人識の目の前には宙に浮かぶ一体の人形。無感情な硝子の瞳に人識の困惑した顔が映っている。肘と指先の間ほどの大きさの赤い服を着た人形はとても精巧な作りをしていたが、首から提げたメモ帳が色々とぶち壊しだった。メモ帳には丁寧な字で何事か書き込まれている。
『いらっしゃいませ、こんにちは』
「私は会った事が無いから何とも言えないけど、こんなのがライバ

ルな魔理沙って何なのかなと悩まざるをえないね」
「友人なら信じてあげたらどうだ？」
「零ってば心にも無い事言うんだね」
「心があるか疑問な殺人鬼だぜ」
「吸血鬼でも心はあるよ！」
人形は覚束ない手付きでメモ帳を一枚剥ぐった。捲られた下のメモにも何事か書かれている。
『ご用の方はこの上海についてお入り下さい』
「……以前の疑問が解決するかもしれない。現代（あっち）に無いなら幻想郷（こっち）に……」
「レーちゃんどうかした？」
「どうもしない。只の戯言さ。ところでいつになったら呼称は安定するんだ」
「もうしばらくお待ち下さい、作者の調整が終わらないので」
動かないで話し込んでいる二人に業を煮やしたのか、上海は首から提げたメモ帳を二人へと投げ付けてきた。人識が空中でキャッチして投げ返すと、上海は流石に受けきれず顔面で受け止めた。
若干不機嫌そうに前を行く人形の後ろをついて二人は白い家へとお邪魔する。紅魔館もそうだが、この家も洋式で土足である。廊下の端々にはハタキや箒を持った人形達がたくさんいた。こちらには目もくれずに黙々と掃除をしている。
幾つかの部屋を通り過ぎ奥の扉を開けると、そこは初夏の日射しの射し込む大きな硝子天井の部屋だった。
「焼け死ぬってーの！」
吸血鬼って大変だ。部屋の中で日傘を掲げながらフランが呻く。部屋の中央のテーブルで縫い物をしていた金髪の女性が慌てて立ち上がった。
「ちょっと、紅魔館の所の吸血鬼じゃない。珍しい来客どころの騒ぎじゃないわよ」
肩までの金髪に蒼い瞳、どう見ても外国人な女性は立ち上がった

後、どうすれば良いのか分からなくなったのかまた腰を下ろす。周りの二体の人形が妙にぱやぱやした動きで辺りを走り回っていた。
「あー、あんたがアリス・マーガロイドとやらか。ちょっと道を教えて欲しいんだ。つっても、あんたに人生とかを説いて欲しいって訳じゃあねーから安心してくれ」
「ぜろりん、マーガロイドじゃなくてマーガトロイド。人の名前はちゃんと覚えてあげないと」
かなり投げやりな物言いの二人に頷きながら、とりあえず椅子を薦めてみるアリス。大人く座る二人。座っているととても日傘は邪魔だと新たな発見があったが、流石に放り出す訳にもいかずにフランは膨れっ面をしている。
直ぐに人形が三人分の紅茶を運んで来た。紅茶セットをテーブルの上に置いて下がろうとした人形の内一人が不幸にもフランに捕まってしまい、手の中でじたばたともがく。それをぼんやりと見ながら、人識は軽く肩をすくめた。
「人形遣いって言うからさ、俺はマリオネット的なのを想像していたんだが」
「マリオネット的なものよ、これは。私が操って動かしてるの」
「全自動……ならぬ全手動、か。勝手に掃除してくれんのは便利だなと思ったが、逆に面倒だな、それ。どうやって動かしてんだ？」
フランは二人の話を聞いていない様子で、人形をつついたりして遊んでいる。人形は必死で抵抗するが如何せんサイズが違う為、じたばたするくらいしか出来ないようだ。
「魔力の糸を、こう、あれして、それして、ふんだらららーでマリオネット」
「魔力の糸……曲弦糸？　それって触ると肌切れたりしないのか？」
「極限死？　良く分かんないけど、しないわよ。人形扱う度に指先切れてたらヤバいじゃない」

フランの手の中の人形は、今や丸裸にひん剥かれていた。綿を詰めた肌色の布の塊が彼女の手の上を尚も暴れている。
「いやさ、お前は何してんだよ。人形の裸とかホラーだろ」
「製作者の前でホラーとかグロいとかエグいとかキモかわとか言わないで」
「可愛くねーよ」
だが、只の布の塊が、例え目鼻はあるとは言え、ただ暴れているだけという映像は若干のトラウマ成分が期待できる、と人識は思った。と、途端に人形は脱力して大人しくなった。その隙に、アリスが驚くフランの手から服と可哀想な人形を奪取する。
「細かい所は企業秘密なのよ。それに魔法も使えない素人さんに話しても仕組みなんて理解できないでしょうし」
「ところでぜりりん、帰り道聞くってのはどうしたわけ？」
「ゼリーじゃねーから、どこもゲル化してねーから。いや、道の件はもういいんだ」
道が分からなくても、フランが上空からぐるりと一回り見回せば良いだけだと人識は気付いていたので、面倒は避けた。大体こんな森の中では何を聞いても同じだろう。
ぼーん、ぼーん、と重い音を立ててかけ時計が十二時を打った。もう真昼か、とアリスは立ち上がる。
「どうせ宛は無いだろうから、お昼ご飯は食べていきなさいよ。まあ、大した物は出せないけど」
「聞いたかフランちゃん、魔法遣いの昼飯だとよ」
「どんなゲテモノが出てくるか、わくわく」
「普通にご飯と魚だけど？」
「「和食かよ！」」

零崎人識が上海紅茶館、ロンリーアリスの憂鬱（後書き）

パスタとか、ねーよｗｗ
一人さびしい魔法使いはきっと家事スキルが低いに違いない。
いつも人形にやらせてるし。

どうでもいいが魔法っていえばなんでも解決するような気がする今日この頃。

零崎人識の帰還、ナイフがほしい（前書き）

リグルリグル

零崎人識の帰還、ナイフがほしい

アリスのところでご馳走になった昼飯は宣言通りご飯と魚と味噌汁だった。期待通り、ご飯が食べてはいけない虹色をしていた為、フランは結構機嫌が良かった。

「という訳で私は今は機嫌がいいから、そこの貴女の事は見なかったことにしてあげるわ」

「どんだけ上から目線だよ！」

二人の前には頭を抱えながらも全力反論する少女がいる。半袖半ズボンに赤黒いマント、頭からは触角的な何かが生えている。

「吸血鬼だかなんだか知らないが虫を嘗めんなよ！」

「いや頼まれても舐めねーよ。そんな趣味は無い」

フランの説明によると、この少女は低級妖怪のリグル・ナイトバグだそうだ。どうしてひっきーのフランがそんな事まで知っているかというと、パチュリーに聞いたとの事。

なんとか森の外れとおぼしき所まで来たが、この幻想郷には妙な奴らが多くてかなわない、と人識は呻く。一般人はいないのか。

「ここで問題です。あの人は何の妖怪でしょう、ヒントはＣ！」

「Ｃｏｃｋｒｏａｃｈか？」

「ゴキブリじゃねーよ、蛍だよ！　嘘ヒントじゃん！　くそ、どいつもこいつも好きに言ってんな！」

「だーれが殺ーしたクックロビン！」

「Ｃｏｃｋｒｏまでは合ってるけどね！　残念だけど私、鳥じゃないから」

テンション高いリグルの突っ込みを無視してフランは歩き出した。

相変わらずテンション変動率の高い奴だ。人識も後に続く。
「無視すんな！」
虫が何か言ってるが、フランは立ち止まらない。リグルは無反応のフランに敢えて近寄ろうとはせず視線をくれた人識の方に寄っていった。人識の赤い半袖パーカーの端をつまんで軽く引っ張る。
「ちょいと、おにーサン外の人でしょう。駄目だよあんな吸血鬼にホイホイとついて行っちゃ、特にちっちゃい方」
「どっちも小せぇだろ」
「おにーサンなんてペロリだよ、ペロリ。血吸われてムシャムシャなんだから。後で後悔するよ。運良く逃げれてもその辺の腹ペコルーミアにペロリされたりとかパンク夜雀にアッーされたりなんだりなんだから！」
その辺りで、煩かったのかフランに蹴飛ばされて、リグルは藪の向こうに吹っ飛んでいった。悲鳴が長い尾を引いて遠くに行って、しばらくして断末魔の声と共に何故か地鳴りが聞こえたが、まあ気にしない事にする。
人識は、前を行く小柄な後ろ姿を見ながら、構ってちゃんな蛍の言った事を少し考えてみることにした。フランの背中から生えた妙な形の翼が揺れる。
この幻想郷という場所では人外も動物も人間もそれなりにやっていけてるが、そこにある差が消えてなくなった訳では無論のことない。寿命とか体力とか身体的な問題、さっきの話のように食う食われるの話。更にしての問題はと言えば、今のところあった連中の中で純粋な人間は二人しかいなかったことか。
食う食われるなんてもんは只の人殺しと変わりないわけで、幻想郷の人間にとっては一番の死因はそれだろう。紅魔館の連中に取って食われる予定は入っていない筈（食うなら助けたりしないだろう）ならば、気にするのは妖怪（相手）の身体能力の高さ。下手をすれば、いやしなくても、あの真紅を超えるレベルがいるかもしれないのだ。まあ、アレは別格だから普通にフランにでも勝てるだろうが。“スペ

ルカード戦”という人間の為のルールが、未だに理解仕切れて無い彼では腹を空かせた妖怪と遭遇したら太刀打ち出来るか謎なところだ。
「なあ、妖怪とかっていきなり襲いかかってくることはあるのか？」
「知らなーい」
知らないのなら仕方が無いか。いずれ分かる事だろう。それまでになんとかしておけば良いか。
「……とりあえずナイフ欲しいなぁ」
森を抜けて開けたところに出ると、目の前には広い湖が広がっていた。霧の向こうには紅い邸。人識の周りでは相変わらずフランがぴょこぴょこと回っている。
そして目前に水色の少女。
「あたいは蒼の絶対零度こと？。ここをとうりたくばスイカバーを十本おいていくがよい」
うっわうぜぇ。
「チルノ、アホな事言ってると溶かすわよ」
「あ、フランじゃん。おは」
「おは、って言うかこんち。通せ」
「しかしガイアはあたいになんびとも通してはいけないと「はい、ドーン」
ドーン、軽く突き飛ばしたような感じでフランはチルノを蹴飛ばした。湖の真ん中辺りで盛大な水しぶきが上がる。
「お前容赦無いよな」
「それが彼女の為であるとかなんとか」
湖の周りに沿ってしばらく歩いて、漸く二人は紅魔館へと帰還した。
「フラン、いきなりはちょっとひどいと「はい、ドーン」

零崎人識の帰還、ナイフがほしい（後書き）

はい、ドーン。

零崎人識が幻想入り、彼は零崎人識（前書き）

短い。

零崎人識が幻想入り、彼は零崎人識

「お帰りなさい、長い散歩でしたね」
「咲夜ただいまー！　外で問題起こさなかったよ！」
「十分起こしていたと思うが」
　フラン的には問題は起きていないのでＯＫということか。人識は呆れてフランを見たが、フランは気にしないで走って行ってしまった。
「メーリーン遊んでー」
「げはぁっ！　は、腹に刺さった……」
「何がだ」
「……腕とかじゃない？」
　人識は永遠亭での白昼の惨劇を思い出して、納得して首肯する。それからあの中華な美鈴を思って黙祷した。妖怪は丈夫らしいから死んではいないだろうが。
　特にする事も無くなって、人識はぶらぶらと紅魔館内を彷徨ついてみる。たまに通りすぎる仕事中の妖精メイド達の視線を気にする事なく気ままに廊下を歩く。
　二階の階段を登った所で館の主人と鉢合わせた。レミリアは、眠いのか、うつらうつらとしながら歩いている。右に左に歩を乱して、終いには開け放された窓の方に倒れ込む。
「あっっっつ！」
　当然、日に焼かれて悲鳴をあげる。肉の焼け爛れる異臭がして、レミリアはぐるぐると跳び跳ね回る。方向感覚がイカれたのかあちこちの壁に衝突した後うめき声と共に止まった。

「……大丈夫か？」
なんと声をかければ良いのやら。散々悩んだ末に出したのは至って当たり障りのない言葉だった。レミリアは彼の言葉に頷きつつ意外としっかりと立ち上がって見せて、今更ながらに恥ずかしい所を見せたと顔を曇らせた。人識としては既に第一印象からしてレミリアがろくな人種じゃないことはわかっているから特に気にしない。
「ふっ、そこの人間。私と一緒にイギリッシュなティータイムをしないかい？」
「一語で却下したい気分ではあるがイギリッシュというのがイギリス的なという意味であるなら無言で却下しよう」
「エ、エネルギッシュの縁語よ！　多分」
せめてブリティッシュと言って欲しかった。レミリアは誤魔化す為にか無理に胸を張って歩き出した。やれやれと首を振って人識も後に続く。
館の裏側、少し窪んだ所に白いテーブルが置いてあった。いつの間に用意したのか、テーブルの上には紅茶のセットとクッキーが置いてあり、咲夜が静かに控えていた。本当にいつ来たんだ。
「ちょっと、何をぼーっとしてるの」
ちょこんと椅子に腰かけて手を振ってる幼女を半眼気味に見て、席に着く。クッキーを一枚取って口に放り込む。久し振りの甘さに少しだけ顔を綻ばせた。
人識は花壇の周りを飛んでいる蝶々を数えつつ、同じ数だけクッキーを並べてみる。レミリアがじっとこちらを見てるのも気にしないでさりげなくクッキーを確保。
「うーん、……やっぱり違うわよね」
「何がだ？」
聞き返すと、レミリアは紅茶を上品に飲みながら首を傾げる。
「幻想郷に来た外の人はそんなに落ち着いてないわ。妖怪だっているし、外のものは使えない。自殺志願者も多いし」
「まあ、俺は所謂ホームレスみたいなもんで持ち物は少ないからな。

携帯も持ってねぇし。落ち着いてんのは、……そうだな外にも人外はいるし、俺は馴れてるから」
「ふぅん、そんなもんかしら」
クッキーがあっという間に無くなったのには触れずにレミリアは優雅に紅茶を飲む。人識は人識でおかわりした紅茶に角砂糖を投入しながら、パフェ食いてぇ、と思っていた。だが幻想郷の住人にパフェなんて物がわかる筈もなく、彼が甘味の話題で盛り上がれる元女子高生に会えるのはもっと後の話である。今はただ、甘い紅茶の味を楽しむだけだ。
「ああ、そうだ。博麗大結界が穴だらけらしいじゃない。修復の為に暫くは帰れないって聞いたけど、勿論その間の宿泊先はここで良いわ。一度許可した手前、そこは許しましょう」
思い出したように言いながらレミリアは笑う。無駄にカリスマが溢れる悪どい笑みを浮かべて、獲物を追い詰めるように続ける。
「でも、あまり長期に渡るようなら仕事をしてもらうわ。メイドの仕事は頼まないから安心なさい」
こいつ、俺に何させる気だ。嫌な予感に顔をひきつらせた人識が助けを求めて咲夜を見るが、メイドはそっぽを向いて眼を合わせようともしない。それこそ戯言遣いのような扱いをされては堪らない。が、逃げても行く宛てなど無い。
「私も暇だからね。私達姉妹の退屈しのぎくらいにはなって頂戴ね？」
非常に帰りたくなった。あの死んだ人間の目とかお洒落頑張ってる台詞とか変態鋏が恋しくなるようじゃ終わってる。
「っく、ここにきて初めて向こうが恋しいぜ。甘いものもあまりなさそうだし」
でも帰りたいと思っても帰れないのであった。

零崎人識が幻想入り、彼は零崎人識（後書き）

第一章完！
終わってないけど完！
落ちてないけど完！

姉貴にぜろりん女装させろとか言われたけど無視。

とある殺人鬼と歴史喰い（前書き）

二章目プロローグ的な。

とある殺人鬼と歴史喰い

「え、えーっと」

人間の里、寺子屋で先生をしている半分人間の歴史喰いは目の前に座る少年を見て、いつに無く微妙な表情をしていた。微妙、と言うか珍妙。落ち着きを払って正座をしてはいるが内心では疑問符を大量生産していた。

有り体に言えば困っていた。

彼女は所謂半獣という奴だ。半分は人間、もう半分は白沢という獣で、月に一度有角の異形へと変身する。白沢とは中国に伝わる神獣であり、人語を解し万物の情に通じると言われている。普段は寺子屋の先生をしながら歴史の編纂も行っている。

そんな彼女の対面に座っているのは全体的にボロくなった赤いパーカーを着た少年だ。斑に染められた髪、耳からぶら下げた携帯用ストラップ、頬には大きな刺青。彼は実は少年と呼べるような年齢ではないのだが、幻想郷にはそんな事を気にするような人（含む人外）はいないのであった。

「ん？　俺何かあんたが困るような事言ったか？」

そう言って零崎人識は笑った。相変わらずの素敵笑顔で。

「いや、困ってると言うか、困惑しているんだが……」

「っかしいなぁ、あの銀髪メイドさんは“紅魔館はどっちの方なんですか”って聞けば大丈夫だっつってたのに」

こりゃ大変だ、と全然大変そうではない素振りで肩を竦めて、人識は首を傾げて見せる。

「空も飛べない一般人である俺は、このままだと帰り道の弾幕ランニングの途中で力尽きてしまうかもしれない」
「えーっと、送ってやれば良いのか？」
「道を教えて欲しいんだよ」
どう見ても堅気じゃない上に里の人間でも無さそうな人識を観察してみる。本人は笑っているがボロボロの服やあちこちに見える擦り傷は、どう見ても道を教えてそれでおしまい、では駄目だと思われる。お節介さんで更に人間の味方を称する彼女は、彼を無視する事は出来なかった。
「……いや、送ってやる。遠慮はするな、これでも腕は立つんだ」
立ち上がり軽く溜め息を吐いた。教室の窓から外を見ると、日が落ちてきて暗くなり始めた空が見えた。時計を見るともうすぐ五つになろうかという頃合いだ。
「おー、んじゃあ頼もうかな」
顔の刺青を若干歪めて、赤い殺人鬼はかははっ、と笑った。

―

人識が幻想郷に来てから早五日が経とうとしていた。その間に彼が分かった事と言えば、紅魔館の住人の生活に規則性は無くいつこちらに面倒が降りかかるのか分からない、ということ位だ。レミリアは基本的に夜に起きているが、フランは好きな時に寝て好きな時に暴れている。一日中暇しているので無理も無い。
館に住み込んでいる妖精メイド達も見慣れない外の人間に初めは遠巻きにしていたものの、三日もすれば馴れた様子で話しかけてくるようになった。まあ、話しかけられても話は通じないが。何の木の実が美味しいとか言われてどう返せば良いのだ。

更に人識にとっては大変な事に、幻想郷独自の“スペルカード”が厄介だった。聞く所によると、このスペルカードというのは幻想郷で一番人気のある勝負方法で、ほとんどの者が利用しているのだそうだ。なので会う人皆が嬉々としてスペカを宣言するのだが、人識、いや恐らく零崎全体にとって、このスペルカードというのは鬼門なのだ。

相手を直接倒すとか、戦うとか、そういう物ではそもそもないのだ。ただ想いを形にした弾幕を、互いにぶつけ合う。意味がそのまま力になり、言葉がそのまま弾になる。スペルカードとはそういう物だ。殺し会う以外の、“遊び”の手段。幻想郷だからこそ発展した、勝負方。今まで殺気に頼り、殺気を求めて戦っていた零崎には、暴力の世界の住人にとっては理解できない“戦闘方法”。

故に、人識は幻想郷に来てからずっと逃げ回っていた。それはもう、彼の兄貴が聞いたら笑顔でゴーサイン（キルサイン）を出すレベルで。逃げ場の無い地上とは言え、数多くの激戦を潜り抜けた人識には避けることなど造作も無い。が、反撃となるとそうはいかないのだ。相手は平気で空を飛ぶ輩ばかり、空も飛べない彼にはどうしようも無い。

「と、いう訳で、俺は強くなりたいんだと少年マンガ的展開のようなセリフを吐かせてもらってもいいかい？」

「私に聞かれても……」

また先生を困らせる人識君。その台詞は某氷妖精が毎日呟いているので、どうなのかなと思う。

日暮れの道を二人並んで歩いていた。格好良く言えば逢魔が時という奴だ。端から見ると教師と生徒、と言うよりは委員長と不良生徒に見えなくもなかった。

「幻想郷（ここ）じゃあ人間が一番立場的にも実質的にも弱いからな、外から来たんじゃあ戸惑うのも無理は無い」

「戸惑うってか純粋に困ってるんだがな。……俺あんたに外から来たっつったっけ？」

「言わなくても、お前のことは話題になってるぞ？　外から来た妙

な奴の事は」
何が妙って、どう見ても人間なのに妖怪じみた雰囲気を持っているのだ。笑いながら人を殺すような残虐性と、それを無表情でしそうな無関心さ、可能にする暴力の匂いを、里の人間や妖精達は的確に嗅ぎ付けていた。普通の迷い人ではなく、紅魔館のメイド長のような、危うさを。
「へえ、上手く隠せてると思ったんだけどな。こりゃあ俺も本当に……、いや、良く考えたら京都の一件以来そんなもんか」
「で、お前は何なんだ？　場合によっては里への出入りを禁止するぞ」
「人を殺さないようにと約束させられた殺人鬼さ。ここに至ってまで約束を守る必要はねぇが、約束した内容も内容で相手が相手だ。守ってるに越したことないだろう」
殺人鬼、顔を少ししかめる。数多くの歴史を編纂してきた彼女でもイメージしづらいものだったからだ。ついでにこの少年は何歳だろうとも思った。
「良く、分からないが……幻想郷では里の人間を殺すのは駄目だからな」
それは妖怪と人間の間での取り決めだが、一応そう言っておく。
「へいへい、わーってるよ」
肩を竦めて言う人識。何故彼は紅魔館に身を寄せているのかと不思議な思う。幻想郷だって広い、どこにでも行こうと思えば行けるのに。
「そもそも、何でボロボロの格好であんな所にいたんだ？　飛べない人間がいるような場所じゃないだろう？」
常人ならば立ち入ることすら避ける魔法の森、まあ人間にとって危険じゃない場所なんてここには存在しないが、毒茸や化け茸の胞子が立ち込める森。薄暗くじめじめした木々の中にあまり強い動物はおらず、視界も悪い為に迷いの竹林に次人は寄り付かない。熟練の茸取りか、毒にある程度の耐性がある者に限られる。

そんな場所に、何故人識はいたのか。
「迷子になったっつうか置いてけぼりにされたっつうか。黒い魔法使い風の奴に追いかけられてて、気付いたらあんな所にいたんだよ」
「黒い魔砲遣い、魔理沙か」
「そうそう、確かそんな名前」
一応、彼の名誉の為に言っておくが、これまで弾幕（あそんだ）った中で、人識がまともに被弾した事は無い。初日にフランと遊んだ時を除けば、全てかすっただけのものだ。しかしその中で僅かにでもかすった弾は人識の衣服、主に上衣をボロボロにしていた。
そのこともあって、彼女から見たら泣く子も殺す天下の零崎（こう言うともの凄く悪人っぽい）も、ただのか弱い人間でしかない。
「お、着いた着いた。あそこからここまでの道のりは覚えたし、まあこんなもんかな」
最早半分程を地平に沈めた太陽の日射しを受けて、紅い館はいつも通り不遜に立っていた。門前に立つ門番が二人を見付けて意外だと言いたげな顔をした。
「ここまでくりゃあ十分。ありがとな、えっと……」
「慧音だ、上白沢慧音。人を殺さないと約束してくれるならいつでも歓迎するし、何かあったら気軽に声をかけてくれて構わない、力になれるかもしれないから。これでも里の皆からは頼られてるんだ。それと、幻想郷の人は、人間も妖怪も一筋縄じゃいかないから気を付けろ。外に帰る気があるなら尚更、な」
至って真面目にそう言った歴史喰いの半獣を、人間を失格していると評された人鬼が不思議そうに見る。少し驚いたようで、心底、愉快そうに。
「あんた、心配性って言われたことは？」
「お節介となら何度でも。自覚はしてるよ、お人好しってのもね」
「お人好し、な。まあ、機会と必要があれば頼むこともあるかもしれねぇから、そん時はよろしくと言っておくぜ」
そう笑って、人識は紅魔館の方へ歩いて行った。それをぼんやり

と見送る。さよならの一言も無いのは、彼が彼たる所以だろうか。
「零崎、人識か。変わった奴だな」

とある殺人鬼と歴史喰い（後書き）

さて、またぼちぼち投稿していきたいと思うので、
まあ、よろしくしてくれなくても思い出したときに読んでくれればいいと思います。はい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3259u/

とある殺人鬼と紅い吸血鬼の幻想話

2012年1月14日14時49分発行